



Title	バシキール自治共和国の形成：一党制政治システムの形成と民族自治の問題によせて
Author(s)	西山, 克典
Citation	北海道大學文學部紀要, 35(1), 1-51
Issue Date	1987-01-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33508
Type	bulletin (article)
File Information	35(1)_PL1-51.pdf



[Instructions for use](#)

バシキール自治共和国の形成

——一党制政治システムの形成と民族
自治の問題によせて——

西 山 克 典

目 次

はじめに ——研究課題の設定——

- I バシキール解放
- II バシキール革命委員会
- III 一月事件
- IV 六月事件
- V 一党制政治システムの形成

結びにかえて

はじめに ——研究課題の設定——

20世紀初頭の帝政ロシアは中央ロシア Центральная Россия とその周縁にいくつもの辺境地域 окраина を配する、中枢＝辺境構造を内在していた。この中枢＝辺境構造は、ロシア革命の展開過程で、中央ロシアでのソヴェト権力の擁護・維持に対し、辺境地域での著しい自立性の発現となって現れた。中央ロシアと異なる政治・経済的、文化・社会的構造を歴史的に形成してきた辺境地域は、内戦と干渉戦の舞台となり、やがて赤軍に解放され、中央ロシアへ再統合されていくが、民族解放運動の主体形成と民族問題が鋭く問われる「場」であった。ヨーロッパ・ロシアの東部に位置するヴォルガ＝ウラル地域はこの辺境地域の一つを成し、1918年春にソヴェト権力によって、複雑な民族構成をもつこの地域社会の統合のため、「タタール・バシキール共和国」プランが提出されたが、内戦の終了する1920年には、このプランが放棄され、タタールとバシキールの個別の自治共和国、チュヴァーシ、マリ、ヴォチャークの各自治州の形成が確定した。

バシキール共和国の形成をめぐる問題は、ヨーロッパ・ロシア東部辺境地域の民族問題であるとともに、ロシア革命からソ連邦の形成に至る時期の民族問題を鋭く表現するものの一つとして、従来、注目され論争されてきた。

ソ連邦では、1926年から28年に『プロレタリア革命』誌で、バシキール問題が激しく論争された。この論争でX. ユマグロフは、ロシア農民から成るクラーク移民とバシキールの農牧民の対立に至るバシキールリヤの複雑な社会・経済状態を強調しつつ、地方の共産党組織とソヴェトがバシキール政府とその民族自治に敵対的に行動したとし、その背景に、地方の党活動家の大ロシア主義とタタールの覇権主義の存在を指摘した⁽¹⁾。これに対して、Φ. サモイロフはバシキール革命委員会は「小ブルジョワ民族主義者」から成り、小ブルジョワの利害を追求し、他の東方ムスリム諸民族と連絡をとり、バシキールリヤの孤立とソ連邦からの完全な分離を志向したと述べ、その政策を「反党的」と厳しく批判した⁽²⁾。この論争は結着をみないまま、20年代末から30年代にかけて、バシキール民族主義へ強い批判のアクセントを置きつつ、III. チペエフとサモイロフが研究を先導し⁽³⁾、スターリン時代には、バシキールリヤ州党委員会書記のP. ライモフが一連の研究を発表した⁽⁴⁾。スターリン批判後は、史料集や研究書が多く出版され、スターリンとレーニンの民族問題での対立も明らかにされたが、民族問題を扱う知的枠組は変わらずに存続している。即ち、20年代の論争の活性が失われ、「大ロシア覇権主義」と「地方民族主義」が共産党の民族政策からの「偏向」として図式的に固定され、この二つの「偏向」という問題設定の枠内でバシキール共和国の形成と発展が扱われている。この知的枠組の下で、辺境民族地域ではロシア人プロレタリアートの指導と援助の下で異民族労働者の解放がなされ、民族自決に基づく民族自治が達成されたとされるが、地域の社会経済、文化構造のなかで、二つの「偏向」がとらえ直され、分析されることがなく、従って地方ソヴェトとその独占的な政治的担い手となった共産党組織が、辺境の地域社会で有した原住異民族に対する疎外性とその克服過程の困難性が看過されるのである。

欧米では、20年代から30年代に民族地域のソヴェト権力の樹立に関心を払った人々は、民族の階級分化を重視せず、「ブルジョワ不在性 безбуржуа-

ЗНОСТЬ」の論拠に基づき、民族地域の社会主義革命は根拠がなく、革命運動は反ロシア的方向性をもっていたと主張した。30～40年代の亡命研究者のもう一つの潮流は、「単一不可分のロシア」という大ロシア主義的立場にたち、帝政ロシアの民族問題を過少評価し、民族解放運動を無視し、革命と内戦期の辺境民族地域は彼らの視野から落ちていた⁽⁵⁾。しかし、1950年代に冷戦を迎える状況のなかで、20年代のソ連での論争を継承するかたちで、新しい研究と論争が行われた。ここでは、ロシア人入植者（農民と労働者）に依拠する地方の共産党組織とソヴェト権力、バシキールを糾合・同化しつつムスリムの統一を志向するタタールの民族運動、これらに対抗するバシキールの自立的な民族運動という知的枠組のなかでバシキール問題の分析が行われている。この枠組のなかで研究者の力点は多様である。「モスクワの権力」に民族問題解決の「究極の源泉」をみ、「自治」の“必然”性を説くE. H. カーの“ハイ・ポリテック”の視点から、バシキールの「自治」の“虚偽性”と「原住民」に対する「ロシア人植民者」の勝利を説くR. パイプス⁽⁶⁾、バシキール民族運動の“人工性”を説く論者まで⁽⁷⁾、多様に分岐している。

以上のように、ソ連邦では共産党の民族政策とその「偏向」の枠組において、また、欧米では地域社会における民族的対抗を中心にバシキール問題は論ぜられてきた。この論文では、このような研究史をふまえつつ、バシキール地方（バシキーリヤ）における一党制政治システムの形成という視点から、バシキール自治共和国の形成をとらえ直すことを研究課題とした。時期的には、1919年初めのソヴェト政府とバシキール政府との協定から、1921年春までとし、民族自治の担い手の主体形成の問題とともに、民族自治を実現すべく形成されたバシキール自治共和国に、いかに一党制政治システムが定礎していったかを明らかにしたい。一党制政治システムの形成という視点から、バシキール問題をとらえ直すことにより、ロシア革命における辺境の多様な地域社会を個別の民族史、地域史としてではなく、全体史との有機的関連の下で構造的に把握でき、かつ、1920年代以降のソヴェト政治社会への展望が得られると考えられる。

註

- (1) X. Юмагулов, Об одном неудачном опыте изучения национальной политике в Башкирии в 1918–1920 гг. (ответ тов. Самойлову), «Пролетарская революция» (далее—«П.Р.»), 1928, № 3 (74), с. 170–195.
- (2) Ф. Самойлов, Об одном националистической вылазке или о неизученных ошибках X. Юмагулова. «П.Р.» 1928, № 3 (74), с. 213. この論争はサモイロフが口火を切り次の人々が参加した。Ф. Самойлов, Малая Башкирия в 1918–1920 гг. «П.Р.», 1926, № 11–12; П. Моственко, О больших ошибках в “малой” Башкирии (к вопросу из первых наших опытов в национальном вопросе) «П.Р.», 1928, № 5; С. Диманштейн, Башкирия в 1918–1920 гг. (к дискуссии по этому вопросу в «Пролетарской революции»), «П.Р.», 1928, № 5.
- (3) Ш. Типеев, К истории национального движения и Советской Башкирии (1917–1929 г.), Уфа, 1929; Ф. Самойлов, Малая Башкирия в 1918–1920 гг., М., 1933.
- (4) Р. Раимов, 25 лет Башкирской АССР. «Исторический журнал», 1944, книга 4; его же, К истории образования Башкирской автономной социалистической советской республики, «Вопросы истории», 1948, № 4; его же, Аграрная революция в Башкирии 1917–1923 гг. «Исторические записки», 1950, т. 32; его же, Образование Башкирской автономной советской социалистической республики, М., 1952.
- (5) Н. В. Романовский, О некоторых вопросах критики буржуазной историографии победы Великого Октября в национальных районах России. сб. статей «Великий Октябрь и национальный вопрос», Ереван, 1977, с. 309–310.
- (6) E. H. Carr, *The Bolshevik Revolution. 1917–1923*. vol. 1, London, 1950, p. 329 (邦訳 E. H. カー『ボリシェヴィキ革命』第一巻 みすず書房 1967年 721頁); E. H. Carr, “Some Notes on Soviet Bashkiria.” *Soviet Studies*, vol. VIII, No. 3. (1957, January); R. E. Pipes, “The First Experiment in Soviet National Policy. The Bashkir Republic. 1917–1920,” *The Russian Review*, vol. 9, no. 4 (October, 1950); ditto, *The Formation of Soviet Union. Communism and Nationalism 1917–1923*. revised ed., Harvard U.P. 1964, pp. 161–8; S. A. Zenkovsky, “The Tatar-Bashkir Feud of 1917–1920.” *Indiana Slavic Studies*, 1958, vol. 2, pp. 37–62.
- (7) R. Pipes, *The Formation of Soviet Union*, pp. 52–3. ムスリム統一を目指すタタールに対抗して、バシキールの運動は膨脹させられたとし、その民族運動の“人工性”を主張する見解が西欧に根強いと、E. H. カーは指摘している。E. H. Carr, *Some Notes...*, p. 233, note. 17. ダヴレットソンと田中克彦氏もこの“人工性”論

の影響下にある。T. Давлетшин, Советский Татарстан, 1974, London, с. 152, 174-5. 田中氏は「造成言語」という視点からではあるが、「ソヴェト政権はタタール人とバシキール人とが一体になろうとする「汎イスラム主義」の野望にとどめをさし」、タタール人とバシキール人は別個の自治共和国を「あてがわれた」と述べている。田中克彦『ことばと国家』岩波新書 1981年 163頁。

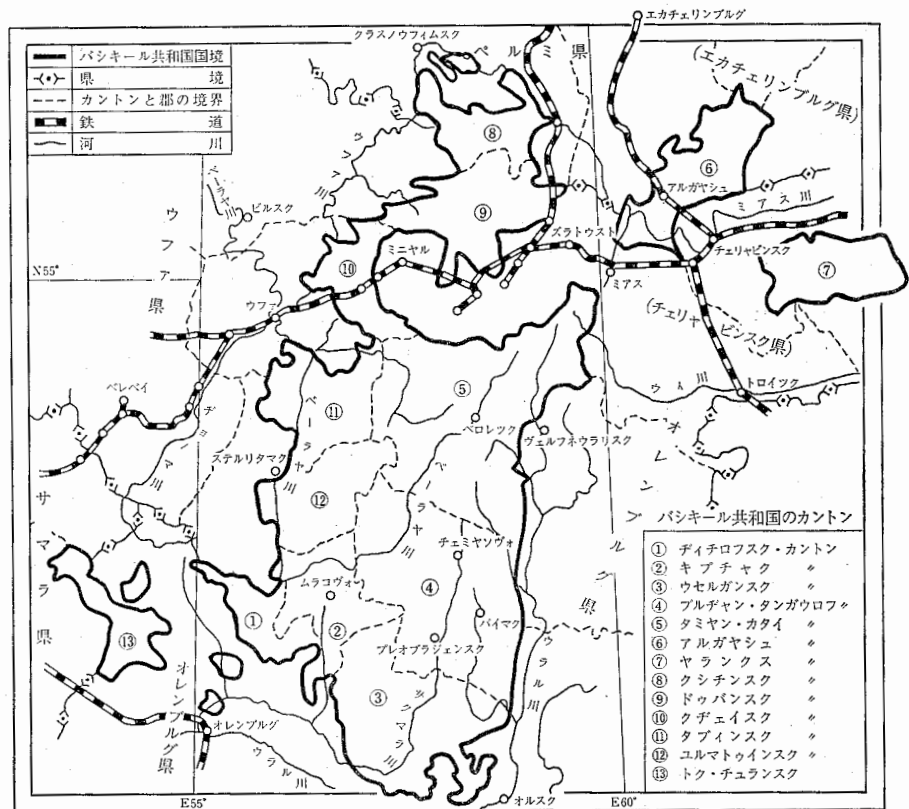
I バシキーリヤの解放

1918年夏に、タタール・バシキール共和国の創設が予定されていたヴォルガ＝ウラル地域は内戦となり、東部戦線が形成され、この地域が白軍から解放されるまで共和国創立ソヴェト大会は延期された。十月革命のなかで自立的権力の樹立を宣言したバシキール政府はコルチャークの側に立ち、自らの部隊を編成し内戦を戦ってきたが、「単一不可分のロシア」の再興を求め民族自治に否定的なコルチャーク政府との対立・不信を強め、ソヴェト権力と密かに交渉をもち、19年2月8日にはソヴェト権力との協定に入ることを決定した⁽¹⁾。2月21日には、ヴェルフネウラリスク郡チェミャソヴォ村で、バシキール全軍大会が開かれ、ソヴェト権力との和平交渉が承認され、ソヴェト権力の側に立ちコルチャークとドゥートフと戦うことを決議し、A. 3. ヴァリードフを議長とする臨時革命委員会を選出し、全権を委任した⁽²⁾。バシキール軍部隊はこのとき既にソヴェト権力側に移っており⁽³⁾、中央のソヴェト政府と正式の協定が締結されたのは3月20日であった。

この3月20日協定はバシキールへの民族自治の承認と引替えに、バシキール軍部隊を赤軍の指揮下に置くことを骨子としていた。協定の第一条は「自治バシキール・ソヴェト共和国は小バシキーリヤ域内で形成され、ロシア共和国 РСФСР を構成する連邦部分成を成す」と述べ、その第九、十条で、バシキール軍部隊は赤軍の指揮下に入り、赤軍と共通の全ロシア的軍事フォンドから、その武装と維持がなされると規定されていた。この協定はバシキール共和国の領域を定め(第二条)、ソヴェト大会召集までは共和国の全権力はバシキール臨時革命委員会が有するとしていたが(第十三条)、この協定で述べられた「自治」には大きな枠組と限定が付されていた。即ち、共和国の権力は前年七月採択のソヴェト憲法を基礎とするとされ(第八条)、共和国の「内

的保安と秩序」は「武装プロレタリアート」によって維持されると述べ（第十一条）、さらに重要な経済部門への支配権が奪われていた。ウラル鉱山業の中心地ズラトウスト郡は特別鉱山区として、バシキール共和国の管轄下に入らず（第四条）、共和国内の鉄道、鉱山、工場は中央のソヴェト権力の「直轄下」におかれたのである（第五条）⁽⁴⁾。（付図参照）

このようにして、3月20日協定に基づき、バシキール軍部隊は赤軍の側で戦うことになり、19年春から夏に、バシキールは白軍から解放された。しかし、この解放過程で再建されたソヴェト権力と地方の共産党組織と、バシキール住民と彼らの部隊との間で、様々な軋轢が生じるようになった。19年



付図 1919年3月20日協定によるバシキール自治共和国(小バシキール)

6月3日付の東部戦線南部軍グループの革命軍事委員会の回状は、3月20日協定後も「不信と嫌疑の政策」がバシキールに対してなされ、様々な抑圧措置がとられていると述べ、具体的に状況を指摘していた。回状によれば、「ロシアはあらゆる自治なしで単一であらねばならない」との理由で、バシキール部隊の武装解除が行われ、さらに侮辱と銃殺さえ為され、民族部隊の編成が認められようとせず、平和なバシキール住民には略奪・暴行、逮捕・銃殺が広く行われたと指摘した。さらに回状は「バシキールに対するそのような不信をもった猜疑の対応はソヴェト諸機関によっても為された」と指摘し、バシキールは赤軍に「抑圧と無権利からの救済者」ではなく、「残虐な暴圧と抑圧者を見ており、ソヴェト権力がバシキール住民全体を「根絶」しようとしているとの「挑発」が行われていると述べ、バシキール解放過程で生じた状況を警告し、バシキールへの対応は「根本において」変えねばならないと指令したのである⁽⁵⁾。

19年春から夏にかけて解放されたバシキールでは、東部戦線の軍政治部により革命委員会が設置され、地方の権力機関と共産党組織が再建されていたが⁽⁶⁾、現地の革命委員会は専らロシア人から成り、バシキール部隊と住民に「不信と猜疑の政策」を行っていたのである。先の6月3日付回状は「以前はバシキールと敵対し、彼らを搾取していたクラーク移民分子の代表から《純粋にロシア的な》革命委員会が植えつけられ、地方の権力機関が反バシキール政策を行っていることを指摘し、軍の政治活動家に「大部分が富裕で、バシキールの搾取によって生活しているロシアの移民」に依拠することはできず、ソヴェト権力の組織化はバシキール政府代表に委ねねばならず、これを支援することを求めたのである⁽⁷⁾。バシキール解放過程に伴うこのような状況は、一部のバシキール部隊を再び白軍の側へ移行させることになった⁽⁸⁾。内戦から解放された民族辺境地域で、革命委員会が設置され、ソヴェト権力が再建されていく政治過程はこのような複雑な社会的対立と軋轢を伴う過程であったのである⁽⁹⁾。

バシキール革命委員会が疎開先のペンザ県サランスクから、8月21日にウファ県ステルリタマクに戻り、実質的統治に入ることを近隣諸県へ伝える

と⁽¹⁰⁾、このような軋轢は一層鋭化し、バシキール革命委員会と近隣諸県の革命委員会、ソヴェト、共産党組織との対立へと発展していった。その主要な対立点は、経済、土地改革、領域とりわけステルリタマク帰属問題、さらに行政機関とその権限のバシキール革命委員会への移管とそれへの近隣諸県の抵抗と多岐に及んでいた。経済問題では、バシキーリヤでの自主的経済政策の実施を目指すバシキール革命委員会と、全ロシア的規模での経済政策の整合性を求める近隣諸県との対立であった。具体的には、バシキーリヤ外への食糧搬出を阻止し、共和国内の食糧調達活動を掌握し共和国内の工業施設へも監督権を強めようとするバシキール政府と⁽¹¹⁾、食糧、木材、羊毛などバシキーリヤの一次産品をウラルの工場と都市へ搬出し、その調達と供給を確保しようとするウファ、オレンブルグ両県のソヴェトと共産党組織の対立であった⁽¹²⁾。

土地改革に関しては、バシキール革命委員会は帝政ロシアの下で進められたバシキーリヤへの移民＝植民政策とバシキールからの土地取上げにより形成された植民地的土地関係の改革を求め、新しい移住入植者の共和国からの追放と、バシキーリヤ外に住むバシキールの招来・居住を求めた。これに対して、ロシア人入植農民の利害に敏感な地方の共産党組織とソヴェトは反撓したのである。9月20日のオレンブルグ県ソヴェト執行委員会幹部会と県党委員会の会議では、バシキール革命委員会批判の論拠の一つとして、「土地問題では社会化が実施されておらず、ただ重い借地条件で土地を与え、ロシア人を土地のために迫害している」と報告されており⁽¹³⁾、10月3日の県執行委員会幹部会は「バシキール革命委員会の政策はロシア農民を憤慨させるだろう」との判断を示していた⁽¹⁴⁾。近隣の共産党とソヴェト組織はバシキール革命委員会に対立して、ロシア人入植農を含む農民の勤労・均等原理に基づく土地用益、即ち、中央ロシアで達成された土地社会化をバシキーリヤで追求したが、これは、劣等な農耕民として定着し、半農・半牧、さらに遊牧、森林業を生業とするバシキールにとっては強力な農民による土地収奪という性格をもつものであった。

領域をめぐる対立は、3月20日協定ではバシキール共和国と近隣諸県の境界が複雑に入り組み、帰属の不明確な地域もあることを背景としていた。ウ

ウファ県党委員会は9月14日に、バシキール共和国に若干のロシア人の郷が編入されたことに対し、「ロシア人とバシキール住民のいる……多くの郷がそのような併合に抗議しているのは明らかである」とし、境界再検討の作業にのりだしている⁽¹⁵⁾。他方では、バシキール革命委員会の政策的自立性に期待をよせ、バシキール共和国への編入により、ソヴェト権力の実施する穀物独占―調達と家畜徴発を免れることを望み、地方住民がブリガヴォールを作成する動きが生じた⁽¹⁶⁾。また、バシキール共和国内のロシア人郷村では、共和国の創設により、自らの権益への侵害に不安を募らせ、分離し近隣諸県へ帰属することを求める動きも現れた⁽¹⁷⁾。このような境界変更をめぐる地方住民の自生的動向は、バシキール革命委員会の政策的自立性と相俟って、近隣諸県とバシキール革命委員会の対立を醸成したのである⁽¹⁸⁾。

ステルリタマクの帰属をめぐる対立は、バシキール革命委員会が疎開先のサランスクから、ステルリタマクへ移り、共和国の首府チェミヤソヴォ村の整備まで、この町を臨時の首府とし、統治し、共和国への編入を求めたことに端を発していた⁽¹⁹⁾。ウファの県党委員会とステルリタマク郡革命委員会はこれに強く抗議し⁽²⁰⁾、結局、全露中央執行委員会幹部会が11月2日に、ステルリタマクをバシキール革命委員会の「たんなる臨時の政府所在地」と決定し、一応の結着をみた⁽²¹⁾。しかし、バシキール共和国政府の担い手たるバシキール革命委員会が、自らの政権所在地を数カ月にわたり統治できない情況は、近隣諸県の共産党とソヴェト組織のなかでバシキール革命委員会の置かれた不安性で困難な政治情況を端的に示すものであった。

1919年秋には、バシキール革命委員会と近隣諸県の対立が表面化したのが、これは地方の共産党組織とソヴェト活動家のあいだに、バシキール民族運動に対する不信を一層強めるものとなった。ヴォルガ＝ウラル地域の革命家・活動家には、18年春～夏の「タタール・バシキール共和国」プラン以来、「民族ニヒリズム」の政治風土が醸成されていたが、オレンブルグ県党委員会は3月20日協定の締結に反対し、否定的行動をとり⁽²²⁾、ウファ県でソヴェト権力の再建を指導したB. M. エーリツィンは「バシキール迫害者 башкироед」の異名をとっていた⁽²³⁾。19年秋に、バシキール革命委員会がステルリタマク

に戻り、実効的統治にのりだし近隣諸県との対立を鮮明にすると、このような政治風土のもとでバンキール革命委員会への不信は昂じ強固なものとなっていったのである。

ウファ県の革命委員会と党委員会は8月20日付の全露中央執行委員会宛電文で、「全国的意義」を強調しつつ、バンキール革命委員会の自立的政策志向を批判していたが、その批判の背後には、他党派や民族主義者への強い不信が漂っていた。この電文では、バンキール政府の多数は「旧左翼エス・エル」であり、メンゼリンスク郡とベレベイ郡では「エス・エル組織の未曾有の成長」がみられるとし、バンキール政府への不信をエス・エルへの不信と脅威に重ね合わせ、連結させていたのである⁽²⁴⁾。9月14日の県党委員会総会では、「バンキール大衆は全く統治するまでに成長していない。彼らの全行動は子供のそれを思わせる」と報告され、バンキール革命委員会には「純粋に民族主義的潮流」、「タタル・バンキール共産主義者の組織」が存在すると指摘された。報告者はバンキール大衆の政治的無能と民族主義的指導部の存在を指摘し、バンキール革命委員会に「責任ある活動家」を派遣し、「プロレタリアの階級的政策の厳格な実施」の任務を負わせバンキール革命委員会のウファへの移転と統制の強化を主張したのである⁽²⁵⁾。

オレンブルグ県では、県執行委員会と県党委員会の9月20日の会議で、討論を主導した県党委員会議長のИ. А. Акрóфは、バンキール革命委員会は「ブルジョワ的」で党組織とその課題のみならず、基本的なソヴェト建設に敵対していると厳しく非難していた。彼は党活動では「バンキール・コミューニストの完全な欠如」がみられ、共産主義ビュローと地方のロシア人住民は全く無視されていると主張し、「中央 центр」のバンキール革命委員会への「外交的」圧力と、地方ソヴェトと党組織のバンキール革命委員会への「後見 опека」の実現を提案した。この会議ではアक्रóфの提案全てが採択され彼が中央へ派遣され、報告することが委任されたのである⁽²⁶⁾。

近隣諸県のバンキール革命委員会への不信の構成要因は、「民族主義的潮流」の存在、「旧左翼エス・エル」の影響、「ブルジョワ的」と多様であったが、この政治的不信に基づき、ウファとオレンブルグ両県のソヴェトと共産党組

織の指導者はバシキール革命委員会への統制と「後見」を求めはじめたのである。バシキール革命委員会に対するこのような両県政治指導者の「後見」志向は、赤軍による解放後の両県における一党制政治システムの形成と軌を一にして強く現れてきたものであった⁽²⁷⁾。

註

- (1) «Образование Башкирской Автономной советской социалистической республики», сборник документов и материалов, Уфа, 1959 [以下「ОБАСССР」と略記], № 100.
- (2) バシキール臨時革命委員会はヴァリドフら 12 人の成員と 6 人の同候補から構成された。Там же, № 112. Валидов, Ахмед-Заки (1890-1970) については彼の自伝が翻訳・紹介されつつある。「ゼキ・ヴェリディ・トガン自伝」『史朋』(北大文学部東洋史談話会) 第 4 号 (1976 年)~第 19 号 (1986 年)。
- (3) ヴァリドフの覚書「バシキーリヤとソヴェト権力」では、バシキール民族運動の指導者の立場から、赤軍の側へ移る経緯が説明されており興味深い。См., М. Л. Муртазин, Башкирия и башкирские войска в гражданскую войну. [Л.], 1927, с. 204-5.
- (4) «ОБАСССР», № 121. 協定の「自治」の内容をめぐる, R. Pipes の過大評価を, カーは正当に戒めている。E. H. Carr, Some Notes..., pp. 221-2. バシキール政府は 18 年 11 月 21 日にソヴェト政府との交渉条件を確定しているが, そこではバシキール共和国の秩序と安寧の維持は「バシキール革命軍」に委ねられるとし, 鉄道・工場施設の管轄権の問題は交渉条件に入っていなかった。М. Л. Муртазин, указ. соч., с. 203-4. 従って, 協定の第 4, 5, 11 条は交渉過程でバシキール側が譲歩したものと推定される。
- (5) «ОБАСССР», № 138. この回状は, その内容からして, ヴァリドフの東部戦線南部軍グループ指令官宛報告覚書に基づいて作成されたものと推定される。М. Л. Муртазин, указ. соч., с. 207-211.
- (6) Р. Ганеев, Советы Башкирии в 1919-1920 гг. (по материалам Уфимской губернии), Уфа, 1961, с. 13-17.
- (7) «ОБАСССР», № 138. с. 250-251.
- (8) М. Л. Муртазин, указ. соч., с. 75-6.
- (9) スターリン批判後, ソ連の研究者は単に軍事情勢のみで説明できない民族地域のソヴェト建設の困難性を指摘し, 内戦期の革命委員会が共産党の民族政策の実施において, 「レーニン民族政策」からの逸脱があったことを確認している。Н. Ф. Бугай, Проблемы революционных комитетов периода гражданской войны в советской историографии. «Вопросы истории», 1973, № 2, с. 141-2.

- (10) «ОБАСССР», №№ 172, 175.
- (11) Там же, №№ 173, 174, 210.
- (12) Там же, №№ 178-181, 189; № 188, с. 320-321.
- (13) Там же, № 189, с. 322.
- (14) Там же, с. 44.
- (15) Там же № 188, с. 321.
- (16) Там же, № 210, с. 355-6; № 215. Дью-マ川に沿うウファ県ベレベイ郡では、バンキール共和国へ併合されると、穀物独占、家畜徴発がなく、商業の自由が許され、現地バンキール人と同様に土地利益が認められるとの「煽動」がなされ、バンキールヤから「共産主義者」が追放されるとの噂も飛び交っていた。Там же, № 216.
- (17) Там же, прим. 162, с. 893.
- (18) Там же, №№ 211, 217; прим. 163.
- (19) Там же, № 174, с. 297; № 221.
- (20) Там же, № 188, с. 320; № 225.
- (21) Там же, № 226, с. 374. しかし、その後もステルリタマクの帰属をめぐる対立は継続している。См., там же, №№ 227-9.
- (22) 19年3月2日の県党委員会では「後に各民族が自から自治を否定するため、自治の幻想 иллюзия автономии をつくるために」バンキールの自治を認めるとの発言がなされた。Там же, прим. 108, с. 885. これに対し、党中央委員会の委任を受け、スターリンは3月7日付電文でウファとオレンブルグの両県党委員会に宛てて、バンキールが無条件で「ソヴェト自治」を得ると伝え、バンキール勤労者への慎重な対応を求めた。Там же, № 119. さらに、スターリンはオレンブルグ県党委員会議長 А. А. Коростељичевと民族問題担当の Г. К. Шамигрофを名ざして、3月20日協定の遵守を強く求め警告する電文を打っている。Там же, № 135.
- (23) Р. Ганеев, Советы Башкирии..., с. 24. 後に、エーリツインは、バンキール革命委員会が実効的統治に入ることを伝えた「指令第一号」を携え、モスクワへ赴き、バンキール革命委員会の行動に抗議することになる。Ф. Самойлов, Малая Башкирия..., «П.Р.», 1926, № 11, с. 203-4.
- (24) «ОБАСССР», № 179.
- (25) Там же, № 188. 報告を行った Б. Н. Нумбизькиは、19年にウファ県革命委員会議長であった。Там же, с. 929.
- (26) Там же, № 189, прим. 141. Аг-рофの経歴については次を参照。Гражданская война и военная интервенция в СССР. Энциклопедия, М., 1983, с. 29.
- (27) Уфа県では、18年6-7月に共産党と左翼エス・エルとの「共闘」が崩壊し、内戦に突入り白軍に占領された。Очерки по истории Башкирской АССР, Т. II, Уфа, 1966, с. 101. 18年12月末から19年4月までウファが赤軍により解放された際は、中央の政策に反して、右派エス・エルとメンシェヴィキの合法化は認められず、共産党主導の下でソヴェト権力の再建が始った。「Переписка секретариата ЦК (б) с местными партийными организациями», сб. документов, М., [以下 «Пере-

писка》と略記] 1974, T. VIII, № 414. しかし、19年春のゴルチャークの攻勢によりウファは再び放棄され、19年5-6月の赤軍による解放後、ソヴェト権力の再建が始まり、この過程で、革命的共産主義者党に、「旧左翼エス・エル」への不信と「タタール・バシキール民族主義者」の影響をみて、その合法化が拒否されている。《ОБАССР》 № 179. 共産党の他党派へのこのような強い不信とその排除を伴う政治的独占の下で再建されたソヴェトに対する「指導」と「統制」の体系としての一党制政治システムが、19年7月末から20年1月にかけて成立した。Р. Ганеев, указ. соч., с. 17, 28-33. オレンブルグ県では、18年7月から19年1月下旬までの7カ月の白軍の支配の後で、共産党とソヴェト機関の再建が行われ、19年春に共産党のオレンブルグ市ソヴェトへの「分ち難い」支配が成立し、翌年3月末-4月初めの第2回県ソヴェト大会までに、一党制政治システムが同県で成立していった。《Переписка», T. VII, M., 1972, № 317.

II バシキール革命委員会

バシキール革命委員会は、3月20日協定に至る政治過程のなかで形成されたが、再建されたソヴェト権力と共産党組織との軋轢を伴う解放過程で、自治共和国の政治的担い手としての主体形成にとりかかった。19年5月17日のバシキール革命委員会の会議では、3. ヴァーリドフの提案により、組織再編が行われた。バシキール革命委員会の成員は15名まで拡大され、その行政業務は外交委員部、民族委員部をはじめ七つの委員部に整理統合され、その議長には満場一致で X. Ю. ユマグロフが選出された⁽¹⁾。これは解放されたバシキールヤの統治へ向けての行政主体の組織的再編であった。バシキール革命委員会は、さらに、共和国の政治的担い手の形成へ動き出した。6月4日付で党中央委員会へ宛てたユマグロフ書簡は、新しい党「トゥルクィン」の創設について、党中央の判断を求めるものであった。この書簡で、彼は自ら新党創設を支持する立場にあると述べ、この考えは「若干のバシキール無党派活動家」から生れ、新党はロシア共産党の綱領を基礎とするが、その宗教、住宅、労働保護に関する部分は省略され、経済問題と畜産では修正され、大きな注意が払われるとし、新党は第三インターへの加盟を求めている、と説明している⁽²⁾。同じ6月4日付で、ユマグロフは、バシキール軍部隊とバシキール革命委員会の共産主義者と同調者の総会が5月16日に行われ、5人から成るソヴェト・バシキール共産主義者・ボリシェヴィキ中央ビュローが

選出されたと伝え、党中央委員会に、その承認を求めていた⁽³⁾。ユマグロフを中心とするバシキール革命委員会はソヴェト・バシキーリヤ共産主義者・ポリシェヴィキ中央ビューローを結成し、その承認を求めつつ、新党「トゥルクィン」形成を打診し、疎開先サランスクへのバシキール党員の派遣を党中央委員会へ求めて⁽⁴⁾、動き出したのである。

このようなバシキール革命委員会の自らの政治主体形成の動きに、それまでバシキール革命委員会へ不信を募らせていた近隣諸県、とりわけオレンブルグ県党組織は大きな危惧を抱いた。9月29日に県党委員会議長アクーロフは「自治バシキーリヤにおける党活動の整序と全バシキーリヤの臨時中央部の組織を目的として」、オレンブルグで党会議を召集するとし、その議事日程に「通報、党活動の設定とソヴェトへの統制、臨時委員会の選出」を掲げ、Γ. K. ジャミグロフにバシキール革命委員会の共産主義者を組織することを求めていた⁽⁵⁾。9月30日にはアクーロフの許に、バシキール革命委員会が党中央に5人から成る「バシキーリヤ・臨時中央ビューロー」の承認を求めているとの情報が入り⁽⁶⁾、彼は10月27日に、ウファとチェリヤビンスク県の党委員会へ、バシキーリヤの党中央部を選出する予定の全バシキーリヤ党協議会へ代表を送ることを強く求めたが、その際、「自らの代表を送ることを強く提案する、さもなくば全く権威のない、バシキール党中央部がつくられる危険がある」と強い危機感を表明していたのである⁽⁷⁾。オレンブルグ県では、党委員会が近隣諸県の党組織代表を糾合し、自治バシキーリヤの党中央部選出とソヴェトへの統制に強いイニシエチヴを發揮しようとしたのである。ウファ県では19年10月にΦ. サモーイロフが全国中央執行委員会代表としてステルリタマクに到着し、彼と民族ニヒリズムの強い傾向をもつウファのE. A. プレオプラジュエンスキが、バシキーリヤの党中央部選出に尽力していた⁽⁸⁾。

バシキール革命委員会と近隣諸県の共産党組織の自治バシキーリヤの政治主体形成をめぐる、このような確執・対抗のなかで、11月8～11日にステルリタマクで、ウファ、オレンブルグ、チェリヤビンスク県の党組織代表も参加して、第一回バシキーリヤ共産党協議会が開かれた⁽⁹⁾。協議会では、組織間問題をめぐり鋭い対立が露わとなった。ユマグロフらは自治バシキーリヤの党

の組織問題で、次のような「原則」を提示し、要求した。

「抑圧民族のプロレタリアートもまた存在する嘗ての被抑圧民族の共和国に於ては、党活動の全般的指導とイニシアチブは原住民プロレタリアートに属し、抑圧民族の代表者はいかなる党機関においても、三分の一以上を占めてはならない。原住民 коммуニストが構成総数の四分の一に至らない時は抑圧民族の коммуニストは、現地共和国の一般的党機関に全面的に服しながら、ただ植民者の間のみ活動を制限される。」⁽¹⁰⁾

しかし、この、植民者から成る抑圧民族に対する「原住民 коммуニスト」を主体とする「党」の組織原則は受け入れられず、協議会では、「組織問題に関する決議」が採択された。この決議は、中央部ロシアでの一党制政治システムの成立を認承した第8回大会の組織問題に関する決議に従って採択され、バシキールヤの党中央部が「全ての党・ソヴェト活動に対して、州委員会の権限内で指導する権利」を有すると述べていた。同時に、決議では、党組織の民族的区分が否定されるとともに、バシキールヤの党中央部に「選挙で全ての責任あるポストに共産主義者を就けることに努めつつ、バシキールヤのソヴェト大会の準備措置をとる」ことが委任されたのである⁽¹¹⁾。この決議により、辺境民族地域の共産党組織は中央部ロシアと共通の綱領と規約の上で組織され、その中央部は党中央委員会に付属する党州委員会として、ソヴェトに対する指導権をもつと確認されたのである。とりわけ、党のソヴェトへの指導権はユマグロフ派が否定したため決議に特に挿入・明記されたものであった⁽¹²⁾。

党協議会で採択された決議で、第二に注目すべきはタタル・バシキール共和国に関するものである。この決議はタタル・バシキール共和国構想は汎イスラム主義者とエス・エルの影響下で作成されたとの認識を示し、「ムスリムの党組織が腐敗し頹廃した事実」を確認し、タタル・バシキール共和国規定の廃止を求め、その実現を求める「タタル・バシキール主義者 татаро-башкиристы」を党から追放すると決定したのである。この決議は「殆んど満場一致で」⁽¹³⁾ 採択され、タタル・バシキール共和国を否定し、独自のバシキール共和国の創設を支持するものであったが、その中で、「自治を

得たバシキールはバシキール民族出身でない共産主義者にバシキールの自治への敵対者を見、猜疑を抱いている。このことは小バシキーリヤ Малая Башкирия の党活動に強く反映している」と指摘し、自治の実現をめぐり、バシキールが非バシキール人共産主義者に敵対者を見出し、党活動に由々しい事態が生じていることを確認していたのである⁽¹⁴⁾。

協議会は最後にバシキーリヤの共産党組織の中央を成す州委員会を選出した。州委員会には K. カスプランスキー、Г. シャミグロフ、Ф. サモーイロフ、И. ラフマトゥーリン、M. タギーロフ、X. ユマグロフ、A. イズマーイロフの7人が選出された⁽¹⁵⁾。この党州委員会の政治的構成は多様で対立を孕むものであった。ユマグロフら四人の成員はバシキール革命委員会を支持し、自治バシキーリヤにおいて政策的自立性と自己の政治主体の形成を志向したが、他の三人はこれに対抗する様々な傾向を代表し、あるいは結びついていた。バシキールのシャミグロフは民族ニヒリズムの傾向を代表し、「自治の幻想性」を主張し、サモーイロフは中央部ロシアの単党制政治システムの辺境バシキーリヤへの導入の推進者となり、イズマーイロフはタタールの民族運動と密接に結びついていたのである⁽¹⁶⁾。

第一回バシキーリヤ党協議会はユマグロフらバシキール革命委員会の構想する、自治バシキーリヤにおける政治主体形成の動きに大きな打撃を与えるものであった。同時に、この時期にバシキール革命委員会は、タタール民族主義者の側から、自らの主体性を否定する大きな脅威に曝されることになった。

既に、1917—18年のロシア革命の過程において、バシキールの民族運動はタタールのそれから、強い自立性を示してきたが、19年春—夏にヴォルガ—ウラル地域の解放の進行とともに、嘗てその創設が延期されたタタール・バシキール共和国の実現を求める動きが活発化したことと関係して⁽¹⁷⁾、バシキール革命委員会はタタール民族運動に対して、強く自らの政治的主体性を主張していた。19年5月13日以降に出されたと推定される党中央委員会宛の電文で、バシキール革命委員会は、バシキールでない多くの共産主義者が「ソヴェト・バシキーリヤ」に反対し、タタール・バシキール共和国を支持し煽

動していると指摘し、そのため「タタール共産主義者の攻撃行動」に対抗措置をとっていると報告していた⁽¹⁸⁾。5月28日には、中央ムスリム軍コレギアに宛て、バシキール革命委員会は、タタール兵士の間でバシキール兵士と住民の自治に対する否定的対応があり、それはムスリム諸組織指導部が「我々の今後の相互関係にとり無意味で危険な《タタール・バシキール理論》を押しつけようとしている」ところに原因がある、と指摘し、バシキールがタタールとは別個の「自立的民族 самостоятельная нация」であることを認めるように迫っていた⁽¹⁹⁾。5月30日には、ロシア共和国人民委員会議に「《タタール・バシキール理論》はバシキールの意図とは別個に彼らに押しつけられた」と指摘し、18年3月に出された「タタール・バシキール共和国規定」の廃止を求めている⁽²⁰⁾。

バシキール革命委員会が自らの政治的主体性を主張し、その撤回を求めた「タタール・バシキール理論」は、19年11月22日～12月3日にモスクワで開かれた第二回全露東方諸民族共産主義組織大会で強く現れた。大会で最大の関心を集めたのは、タタール・バシキール共和国問題であった。大会報告に立ったスルタン・ガリエフは、「社会経済的には多くの点でタタールは、バシキールとキルギスより高く位置し、バシキールとキルギスは政治的同化を必要としている」との認識を示し、バシキールの言語と文化の独自性を述べる人々を「メンシェヴィキ・民族主義者でショービニスト」と悪罵を放ち、タタール・バシキール共和国の創設を主張した。副報告者の M. ブルドゥクトフも、バシキールの言語と文化の存在を否定し、「革命の観点からは、バシキールの領域はバシキーリヤへではなく、タタールスタンへ併合されるべきである」と述べたのである⁽²¹⁾。これに対して、バシキール代表の K. カスプランスキー、M. タギーロフ、И. ラフマトゥーリンは、先の第一回党協議会の決議をもって登場し、統一したタタール・バシキール共和国の創立に反対した。バシキール代表の Г. シャミグロフは独自の立場から、スルタン・ガリエフらに反対し、大会で、「我々バシキール代議員は全ての共和国、全般に反対している。あなた方があなた方の共和国を宣言するならば、小バシキーリヤはソヴェト・ロシアへ編入されるであろう……我がバシキール共和国は共

産主義者がいない時につくられ、現在、我々はそれに反対して闘っている」と表明した⁽²²⁾。大会ではこのような鋭い意見の対立が現れたが、賛成 44、反対 39 で、タタール・バシキール共和国を創設し、小バシキーリヤの自治はその一部として含まれると決定されたのである⁽²³⁾。

この第二回東方諸民族共産主義組織大会後、スルタン・ガリエフらのタタール・ヘゲモニー主義者は現存のバシキールの自治を無視して活動を積極化させた。これに対して、12月13日に共産党中央委員会政治ビュローは、大会で「大きな部分、とりわけバシキーリヤの共産主義者の代表全てがタタール・バシキール共和国に反対したため」、18年3月の同共和国規定を廃止し、党員に同共和国の宣伝を禁止すると決定した⁽²⁴⁾。しかし、バシキールを統合し共和国を創設しようとするタタールの動きは執拗に続けられた⁽²⁵⁾。このような状況のなかで、バシキール革命委員会は、タタールに対抗して、バシキールとキルギス（現在のカザフ）の合同共和国プランを提起するが、これも受け入れられなかった⁽²⁶⁾。

19年11—12月にバシキール共和国の担い手としてのバシキール革命委員会は政治的窮地に陥った。新しく形成されたバシキーリヤの共産党組織とその州党委員会は、一党制政治システムの導入を志向し⁽²⁷⁾、他方、「タタール・バシキリスト」はバシキールの民族的自立性を否定する強い動きを示していたのである。このような政治的窮地からの脱出を求めて、バシキール革命委員会は一月事件を引き起こすことになる。

註

- (1) «ОБАССР», № 152, с. 269—270. X. Ю. Юмагулов (1891—1937) は、ロシア化したバシキールで、18年1月のカザンでの第二回ムスリム軍人大会でポリシェヴィキと共に行動し、19年夏に中央から、サランスクのバシキール革命委員会へ派遣されていた。彼の経歴については次を参照。J. M. Meijer, ed., *The Trotsky Papers 1917—1922*. II., The Hague・Paris, 1971, p. 87.
- (2) «Переписка», Т. VIII, № 61, с. 39. 「トウルクイン тулкын」はバシキール語で「波」を意味し、17年12月にバシキール代表を集めてオレンブルグで開かれたクリルタイに参加したバシキール青年が創刊した文芸誌の名称に由来していた。彼らは、18年2月にソヴェト権力を支持し、バシコルトスタン臨時革命委員会の活動に加って

いく。「トルクティン」の政治的含意はソビエト権力支持とバシキールヤの自治実現であった。

- (3) Там же, № 316, с. 220.
- (4) Там же, №№40, 226, 538.
- (5) «ОБАССР», № 250, с. 408.
- (6) Там же, № 251.
- (7) Там же, № 252.
- (8) E. H. Carr, *Some Notes on...*, p. 224. E. A. Преображенский (1886–1937) は当時ウファの党組織指導者で、彼はウラルの革命家に共通の、経済主義の全体性を追求する立場から、民族的自立性の契機に否定的判断をもっていた。彼のこのような見解は、第二回コミンテルン大会へのレーニンの民族・植民地問題テーゼ草稿に対する、彼の注釈によく現れている。См., *Некоторые документы К. Маркса и В. И. Ленина, «Вопросы истории КПСС»*, 1958, № 2, с. 15–16. プレオブラジェーンスキは、20年春の第9回党大会で中央委員会書記に選出され、ウファを離れるまで、ウファ県党委員会議長として、バシキール革命委員会に対して、バシキールヤの州党委員会を形成することに尽力したのである。J. M. Meijer, ed., *Trotsky Papers*, II, pp. 95–6.
- (9) «ОБАССР», прим. 174, с. 894.
- (10) Р. М. Раймов, *Образование Башкирской АССР*, М., 1952, с. 298.
- (11) «ОБАССР», № 253.
- (12) Р. М. Раймов, указ. соч., с. 299.
- (13) Там же.
- (14) タタール・バシキール共和国に関する決議は次を参照。「ОБАССР», № 259.
- (15) Там же, прим. 174, с. 894.
- (16) E. H. Carr も R. Pipes も、党州委員会は主にロシア人とタタールから成り、バシキールの民族自治を形骸化させていくと指摘するが、重要なのは民族的出自でなく、政治的傾向に基づく成員の分析であり、それに基づく党州委員会の性格把握であろう。E. H. Carr, *Some Notes...*, p. 224; R. Pipes, *The First Experiment...*, p. 314; R. Pipes, *The Formation of...*, pp. 164–5. イズマイロフはタタール民族運動で活躍し、タタール共和国の初代内務人民委員の要職に就くことになる。「Образование Татарской Автономной Советской Социалистической республики», сб. документов и материалов, Казань, 1963 [以下 «ОТАССР» と略記], № 222.
- (17) 19年4月27—30日にシムビルスク県スイズラニで東部戦線及び銃後のコミュニスト＝ボリシェヴィキ協議会が開かれ、赤軍政治部代表とサマラ、オレンブルグ、ウファ県のムスリム・セクツィア・ビュロー代表、33人が参加した。この協議会はタタール・バシキール軍団の組織化とタタール・バシキール共和国の創設を目的として、東部戦線のタタール・バシキール共産主義者中央ビュローを選出していた。この協議会は旧左翼エス・エル活動家の積極的な参加があったと指摘されている。См. «Из

- истории гражданской войны в СССР», сб. документов и материалов, т. II, М., 1961, № 161, с. 194; «ОТАССР», № 82, с. 120-122, прим. 1.
- (18) «ОБАСССР», № 142.
- (19) Там же, № 143. これに対し, 中央ムスリム軍コレギアはバンキールの自治を尊重する旨, 回答した。См., там же, №№ 144, 147.
- (20) Там же, № 145.
- (21) М. К. Мухарямов, Октябрь и национально-государственное строительство в Татарии (октябрь 1917 г.—1920 г.), М., 1969, с. 157.
- (22) Шамигрофと同様の発言をオレンブルグ代表 К. Халиков, Азербайджан代表 М. Ибрафилбеков も行っている。Там же, с. 157-8. 大会でのバンキール代表の人的構成については, См., «ОБАСССР», прим. 179.
- (23) Там же, № 260, прим. 177, прим. 181.
- (24) Там же, № 262.
- (25) М. К. Мухарямов, указ. соч., с. 159-160, с. 175. このようなタタールのムスリム統合を目指す動きは, 翌20年3月まで続いた。20年3月22日に東方諸民族共産主義組織中央ビューローの議長サイド・ガリエフ, 副議長スルタン・ガリエフ, 同幹部会員 Б. Мансурофがレーニンに会見し, タタールとバンキールの間に本質的差異は殆んど無く, 小バンキール以外のバンキールはタタール共和国へ編入されねばならないと主張した。しかし, レーニンは彼らの要望に否定的に答えていた。「ОБАСССР», прим. 182; С. Саид-Галиев, Татареспублика и т. Ленин, «Пролетарская революция», 1925, № 9, с. 111-2.
- (26) З. Вэриердфは第二回東方諸民族共産主義組織大会の開催前に, 大会のバンキール代表に「オレンブルグにキルギスとバンキールの共同政府を創設すること」をロシア共和国政府へ問題提起することが必要であると打電していた。Р. И. Раимов, указ. соч., с. 301. バンキール革命委員会代表は12月13日に全露中央執行委員会のレーニン宛に, バンキール・キルギス共和国案を提出した。この案は, この地域に植えつけられたロシア人とカザークの権力に対抗して, バンキールとキルギスの遊牧民が建国し, ソヴェト・ロシアとは相互代表派遣により関係を維持するということであった。この案の著者は А. Азигамофと推定されている。「ОБАСССР», №№ 263-4. 12月16日の全露中央執行委員会と関連民族代表の会議では, バンキールとキルギスの合同を求めるВэриердфの提案は斥けられ, 先の東方諸民族共産主義組織大会のタタール・バンキール共和国創設決定を支持するという М. Глунддуктофの提案も採択されず, バンキールとキルギスの合同共和国にも, タタール・バンキール共和国にも反対するとの提案が採択された。「ОТАССР», № 116. この時期にバンキール代表は, 「タタール・バンキリスト」, ロシア人共産主義者, 中央の指導者の間で, タタール・バンキール共和国の実現阻止という大目的のために「特別な戦術的・政治的判断から」, タタール, バンキール, キルギスの三共和国合同案を提出したり, タタール独自の共和国の支持を表明したり, 積極的な活動を展開した。「ОБАСССР», № 261. 嘗ての,

ヴォルガ＝ウラル地域の統合を目指したタタール・バシキール共和国規定が廃止され、各民族の指導者が自らの政治的統合と主体性を求めて活発化するこのような状況のなかで、タタール指導者に対抗して、バシキール・キルギス合同共和国プランも提出されたのである。

- (27) 12月に党州委員会が、共和国のカントン党委員会及び党員へ宛てた「呼びかけ」では、ソビエト・ロシアの全ての権力機関が共産党組織に依拠しており、「ソヴェト・バシキーリヤで、我々の下でもそうあらねばならない」と主張され、党組織に行政業務に介入せず、「統制し監督する諸階梯の役割 роль контролирующих и наблюдающих этапов」を引き受けることが求められていた。《ОБАССР》，№ 256, с. 414-5.

III 一月事件

1919年末に明らかとなったバシキール革命委員会の政治的窮地は、翌20年1月16日から19日までの、バシキーリヤの政治活動家の逮捕事件、即ち一月事件へと発展していった。事件の直接の出発点は1月13日の州党委員会の会議であり、ここでバシキール革命委員会議長ユマグロフと他の州党委員会成員の対立が鋭く現れた。第一の対立点はΦ. サモーイロフの提出した「バシキール革命委員会・党フラクション規定」をめぐる生じた。この規定では、「州党委員会の指導下に」バシキール革命委員会・党フラクションを置くと述べられていたが、さらに、「そのため必要に応じて州党委員会はフラクションに決議権をもつ必要人数の成員を導入する」との表現を追加挿入する修正案がアルチョームによって提案された。ユマグロフを除く全員の賛成でこの修正案が採択され、アルチョーム自身がバシキール革命委員会・党フラクションへ党州委員会代表として送られることが決定された⁽¹⁾。この「党フラクション規定」は、党州委員会がバシキール革命委員会・党フラクションに上級指導権をもち、そのことを通じて、バシキール革命委員会そのものに対する政治的指導の実現を目指したものであり、ユマグロフはこれに反対したのである。

第二の対立は、バシキール革命委員会の政治職務への任命をめぐる現れた。州党委員会は、前日の12日にバシキール革命委員会幹部会が、党フラクションの前以っての調整を経ず、「外交部規定」を採択し、その長に K. M. ラカイを、バシキーリヤ・チェ・カー議長に T. T. イマコフを任命承認したこ

とに対し、アルチョーム提案の決議を採択した。この決議は「共産主義建設はロシア共和国 PCΦCP の経済生活の統一を提起しており、自治共和国の組織化に関する協定は分離を提起しておらず、逆に国内経済生活の統一の上に基礎づけられている」との基本認識を示し、共産主義者は分離や分離に導く措置を支持・煽動する権利をもたないと述べた。そして、外交部は分離に至る行動であり、ラカイを全ての責任のあポストから召還し、「責任ある共産主義的ポストへの共産主義者の任命は総て、党州委員会あるいは党フラクションによって承認されねばならない」と決定したのである。さらに党州委員会はバンキーリヤ・チェ・カー議長に A. イズマーイロフ、バンキール革命委員会政治部長に Γ. シャミグロフの任命を決定し、バンキール革命委員会で党フラクションがこの決定を通過させることが委任された。これら全ての決定にユマグロフは反対の態度を示した⁽²⁾。

1月13日の党州委員会は、サモーイロフとアルチョームの主導の下で、外交部を設置しその長を任命したバンキール革命委員会の自立化を警戒し、「経済生活の統一」を強調し、分離に至る動きを厳しく批判し、党フラクションを通じ、バンキール革命委員会の重要人事の掌握をはかったのである。党州委員会は、バンキール民族運動に否定的なシャミグロフ、イズマーイロフをバンキール革命委員会の要職に配し、バンキール革命委員会への指導を確保し、一党制政治システムの形成へ大きく一歩ふみ出したのであった。

バンキール革命委員会は翌14日に緊急会議を開き、「バンキール・ソヴェト社会主義共和国」に対する「反革命クーデター」を企図するグループの存在を確認した。そのグループは、イズマーイロフ、シャミグロフらから成り、彼らは「旧《ウクライナ活動家》」のアルチョーム、サモーイロフ、ドゥードゥニク、ヤロスラーフの支援を受けていると分析された。そして、バンキール革命委員会はこのグループの政策が中央のソヴェト政府と党中央委員会の政策に反し許容できず、その行動は「犯罪的冒険」であると判定し、イズマーイロフとシャミグロフらの逮捕と家宅捜索を決定したのである⁽³⁾。

バンキール革命委員会は、16日未明、彼らをバンキールの自治に対する陰謀の科で逮捕し⁽⁴⁾、同16日にオレンブルグのバンキール部隊へ、「バンキー

ル革命委員会の中央と地方組織の打倒をめざし、ソヴェト中央権力の東方政策に反対する反革命陰謀が摘発された」と伝え、「平静に全ての被抑圧者の解放のため、自らの革命的な光栄あるポストに堅く立ち、世界社会主義の赤旗を高く掲げよ」と打電した⁽⁶⁾。モスクワでは17日の全露中央執行委員会で、バシキール共和国代表 A. アヂガモフ、A. ビクバーエフがタタール共和国をタタール・バシキール共和国と呼ぶことに抗議していた。彼らは、タタール・バシキール共和国という呼称に現存バシキール共和国のタタール共和国への併合と「バシキールの同化」の危険を感得し、党中央委員会へ「タタール・ソヴェト共和国」の呼称採用を求めたのである⁽⁶⁾。

バシキール革命委員会のこのような行動は、バシキール民衆の間に不安な噂さを併発させ、緊迫した政治的雰囲気の中かで展開したが⁽⁷⁾、トルケスタン戦線司令官 M. B. フルーンゼの介入があり、19日にシャミグロフら逮捕者は釈放された⁽⁸⁾。翌20日の党州委員会は「バシキール革命委員会多数派の反革命進出」を確認し、党州委員会総会の召集まで、アルチョーム、サモイロフ、ドゥードゥニクの三人から成るビュローが全ての問題を決裁し、事件の首謀者ユマグロフらは党から除名し、審理のため党中央委員会へ引き渡すと決定した⁽⁹⁾。この一月事件は、党州委員会の一党制政治システム形成への志向と相俟って、バシキールの民族自治に否定的なシャミグロフやイズマroiロフが、「旧《ウクライナ活動家》」の支援をえて、バシキール革命委員会の要職に就きはじめたことに対する自衛行動であったが、その結果は、自治バシキールヤにおける州党委員会の権限の一層の強化に終わったのである⁽¹⁰⁾。

1920年1月にウラルの一地方都市ステルリタマクで起きたこの事件は、ヴォルガ＝ウラル地域の党組織とソヴェト活動家、民族運動指導者を刺激し、彼らの政治的見解の対立と反感を鮮かに照し出した。オレンブルグ県党委員会の一月事件への反応は、この地域の共産党とソヴェト機構のそれを代表するものであった。同県党委員会は一月事件について、党中央委員会へ直ちに打電し、「もし中央委員会が地方党組織の考えを重視しないならば、春にはその結果を予測し難い諸事件が起こるであろう」と警告を発していたが⁽¹¹⁾、1月26日付の党中央委員会宛報告で、自らの見解を全面的に展開した。報告は、

「我々の表明に今迄のように注意を払わねば」もっと悲しむべき事件が起こるであろうと警告しつつ、バシキーリヤの政治指導者に二つのグループが存在すると指摘した。そして、それは「ウルトラ・ショービニスト的なバシキール」から成り、ソヴェト・ロシアからの経済的・政治的「孤立」を志向するグループと、ロシア人、タタール、一部バシキールから成り、バシキーリヤの自治の「空想性 утопичность」を感じ、バシキールの民族的「排他性と孤立性」をできる限り苦痛なく克服することを自らの課題とする人々であると述べた。報告はさらに詳しく、この二つの政治グループの社会的基盤と動向を分析している。即ち、バシキール活動家は「ロシア人とタタール分子の《圧迫 *засилие*》」に脅威を感じ、彼らの排除傾向と共産主義者への攻撃が始ったとし、ユマグロフ派のバシキール革命委員会のこのような民族的偏向と闘ったのがシャミグロフ派であったと指摘する。そして、第一回バシキーリヤ共産党協議会でのシャミグロフ派の勝利にユマグロフ派は脅威を抱き、1月16日の「冒険 *авантюр*」に出たとし、その際、ユマグロフ派が「遅れたバシキール大衆」に依拠したのに対し、シャミグロフ派は「鉱山工場住民、ロシア人とタタール、一部バシキールのソヴェト分子」に依拠したのであり、ユマグロフ派は影響力を増す共産党に対して闘争を行ったと指弾されたのである⁽¹²⁾。

このようなバシキーリヤの政治的分析は、同県党委員会のバシキール革命委員会の政策への批判と⁽¹³⁾、シャミグロフ派へバシキーリヤの未来を託する判断と結びついていたが、同時にその分析の基底にはバシキーリヤの「自治」そのものへの否定的判断が存在した。この報告では、「自治」はバシキーリヤの「孤立性と排他性」を求めるものと判定され、その「空想性」の克服が求められたが、そのような判断の論拠も提示されていた。即ち、バシキーリヤにおける都市と集落、及び交通の配置から、「ロシア人とタタール分子の指導的意義は、バシキーリヤ内の僅かの地方中心地が主にロシア人の工場とロシア人とタタールの集落であることにより強化されている」とし、小バシキーリヤの人口構成からは、ロシア人とタタールが人口の52%を成し、彼らの方がバシキールよりも文化的・経済的に進んでいると主張される。そして、こ

のような状態の下で、自治共和国の先頭に「大部分がコルチャークの系列から出た民族主義的バンキール分子」が立ったことに、バンキーリヤの「悲劇」と自治実現の「空想性」を見出したのである⁽¹⁴⁾。

オレンブルグ県党委員会は一月事件の政治的・社会的背景をこのように分析し、自治の「空想性」を論拠づけつつ、党中央委員会へバンキール革命委員会からのユマグロフ派排除を強く求めたのである⁽¹⁵⁾。

一月事件はオレンブルグと並んでヴォルガ＝ウラル地域の中心都市であるウファとカザンでも、民族感情の対立を醸成した。全露中央執行委員会代表としてバンキール革命委員会へ派遣されていたアルチョームは2月24日付電文で一月事件後、タタル・バンキール共和国の支持者が活動を積極化したことを次のように伝えた。「とりわけ、ウファのタタル・バンキール主義者は有害である。ウファ県党委員会のムスリム新聞『赤い道 Кызыл юл』は、バンキーリヤの活動家ヴァリドフ、クラエフをバンキーリヤのロシア化と正教信仰の普及の故に非難している。イスラムの裏切り者で正教支持者として活動家の姓名の前に大きな十字架がおかれている。同様にカザンの活動家 казанцы はバンキール・インテリゲンツィアを緊張させ怒らせている。」⁽¹⁶⁾ この電文から、ウファとカザンでは、タタル・バンキール主義者が、一月事件の事後処理に、バンキーリヤの「ロシア化」の危惧を抱き、活動を積極化させ、そのことが逆にバンキール知識人を刺激し苛立たせている状況が窺える。3月21日にはウファの県党委員会タタル・バンキール参事会議長 Г. К. Шамигроф とモスクワの東方諸民族共産主義組織中央ビュロー議長 Г. Сайд・Гариеф との直通電話での遺取から、ウファの党タタル・バンキール・セクツィアがシャミグロフを長とする参事会 коллегия に改組され、バンキール共和国を中傷し、タタル共和国の創設を認めないなど「ブハーリン的方向」をとったことに、クレムリンの側が危惧を抱き、ウファの政治方針を問い質したことがわかる⁽¹⁷⁾。

一月事件を契機とした地方レヴェルでの、一党制政治システムの導入と絡みつつ現れたこのような民族的感情の対立に、中央の党とソヴェト権力は介入し、問題の調整と解決に努めざるをえなかった。全露中央執行委員会は、

1月20日付のバンキール革命委員会宛電文で、ステルリタマクへ送られたアルチョーム、プレオブラジェーンスキ、サモーイロフは「ウファの地方的利害とは無縁であり、地方的な民族排外主義的政策を行えない」彼らがバンキール革命委員会に反する煽動を行ったとは考えられないと伝え、逮捕された人々の釈放と彼らの「陰謀」について取り消すことを求め、ユマグロフに説明のため直ちにモスクワへ出発することを求めた⁽¹⁸⁾。党中央委員会政治ビュローの委任を受け発したレーニンの電文も、「アルチョーム、プレオブラジェーンスキ、サモーイロフは紛糾の実質的原因を成さないであろうと全く確信している」と述べ、「旧い同志」に「ブハーリン的方向」というのは「馬鹿らしい口実」であると警告し、彼らに「《ウクライナ活動家 украинцы》という形容詞をつけることは全く正しくない」と指摘し、1月20日付の全露中央執行委員会の電文の実施を求めたのである⁽¹⁹⁾。

中央の党とソヴェト政府の一月事件への介入と調整は、党中央委員会書記H. H. クレスチーンスキを中心に進められた。彼は先のレーニンの電文の原文テキストを書き、3月2日にはJ. トロツキーへ直電でバンキール問題の解決に当るようにとの党中央委員会政治ビュローの指示を伝えている⁽²⁰⁾。トロツキーは既に、2月2日にウファでバンキール問題を審議しており⁽²¹⁾、現地でバンキール問題の解決に介入し、大きな役割を果たすこととなった。彼は中央の全露中央執行委員会やレーニンが、中央の派遣したアルチョーム、プレオブラジェーンスキ、サモーイロフに信頼をおき、バンキール革命委員会に批判的であったのに対し、20年2—3月にウファ、カザン両県を中心に展開したムスリム農民主体の「黒鷲 *черный орёл*」の乱（「熊手一揆 *вилочный мятеж*」）のなかで、バンキール問題への異なる対応を示した。3月2日のクレスチーンスキ宛返電で、トロツキーはバンキールリヤの政治対立では、ウファの活動家が「階級問題を民族問題とすりかえている」と批判し、アルチョームの召還とプレオブラジェーンスキの配置転換を求めたのである⁽²²⁾

トロツキーは党中央委員会の委任を受け、一月事件を契機に露わとなったバンキール問題の解決にあたり、3月14日にウファで審議会を開いた⁽²³⁾。この会議にはステルリタマクのバンキール革命委員会を代表して3. ヴァリール

ドフ、Ф. トゥフヴァトゥーリン、И. ラフマトゥーリン、K. カスプランスキーが、党州委員会及び中央派遣の活動家として A. ドゥードゥニク、サモイロフ、アルチョーム、プレオブラジェーンスキが、そしてウファ県執行委員会議長の B. エーリツィンの 9 人が参加した⁽²⁴⁾。ここで作成された 21 項目から成る議定書は中央の介入により、バシキール問題に一応の調整をもたらした。この議定書は一月事件は今後、バシキール革命委員会と州党委員会のどちら側からももち出されず、バシキール共和国の歴史から消し去られると述べ、バシキール革命委員会はその任務に適っており、それを「反革命機関と評価することは全く許されない」と確認した。それと同時に議定書は、共産党組織がソヴェト機構の行政活動に介入せず、勤労大衆の「指導的政治機関」たることを求め、バシキール共和国の経済政策と食糧政策が「連邦の統一政策」として実施されることを確認し、自治バシキーリヤにおける一党制政治システムの円滑な導入を求めたのである⁽²⁵⁾。会議でサモイロフがヴァーリドフらによる地方の共産党組織への攻撃の問題を提起すると、会議の議長を務めていたトロツキーが彼を厳しく批判したことにみられる如く、ウファ会議の議定書は全体として、バシキール革命委員会の立場を擁護するものであった。会議の翌日、バシキール革命委員会の代表はステルリタマクへ「全ての決定は我々を利している」と打電したのである⁽²⁶⁾。

註

- (1) «ОБАССР», № 265, с. 431. この会議には、Артём, А. Измайлов, Ф. Самойлов, А. М. Дудник, Г. Шамигулов, Х. Юмагулов, Я. Ярослав の 7 人が出席し、議長はユماغロフが務めた。Артём (本名 Сергеев, Федор Андреевич, 1883-1921) は 1918 年以來、ウクライナのドンバスで活動し、19 年 12 月にバシキール援助委員会の指導者として党中央委員会と全露中央執行委員会からバシキール共和国に派遣されていた。アルチョームと一諸に到着した Я. Ярослав は党州委員会の書記を務めることになった。Ф. Самойлов (1882-1952) は 19 年 12 月に全露中央執行委員会代表としてステルリタマクへ到着し、ウファのプレオブラジェーンスキと共に州党委員会の形成に尽力した。А. М. Дудник は、食糧の調達と分配においてロシア共和国と共通の食糧政策を行う任務をおび、ロシア共和国食糧人民委員 А. Д. ツェループによってウファから 19 年 9 月 16 日に、バシキール共和国食糧人民委員に任命されていた。См., Ф. Самойлов, *Малая Башкирия...*, «П.Р.», 1926, № 11, с. 212-3; E.

H. Carr, *Some Notes...*, p. 224; В. П. Иванков, *от. ред.*, *Очерки по истории Башкирской АССР*, Т. II, Уфа, 1966, с. 150-151, 156. サモイロフは当時、バンキーリヤの共産党組織には、どのような党機構 *партаппарат* も書記局 *секретариат* も存在せず、全てはユマグロフの紙挟みの中にあつたと指摘し、バンキール革命委員会にはどのような党フラクションも形成されず、全ての問題をユマグロフが、サモイロフらの反対にあいつつ決定していたと、当時の政治状況を伝えている。Ф. Самойлов, *Малая Башкирия*, «П.Р.», 1926, № 11, с. 211-2. このような政治状況のなかで、党中央委員会メンバー候補のアルチョームが、中央の「非常全権代表」として、バンキーリヤへ到着するとともに、一党制政治システムの導入に向けて強く動き出したのである。

- (2) «ОБАССР», № 265. 1月12日採択の「外交部規定」は全文紹介されている。См., Там же, прим. 183, с. 898-9. また、1月2日の党州委員会でバンキーリヤ軍事人民委員部の政治部長にシャミグロフを任命することが決定されていたが、ユマグロフはこの決定の実施に強く抵抗していた。Ф. Самойлов, *Малая Башкирия*, «П.Р.», 1926, № 11, с. 214.
- (3) «ОБАССР», № 266.
- (4) Там же, с. 45. イズмайロフはバンキーリヤ・チェ・カ議長のパストを横奪し、第二回東方諸民族共産主義組織大会でのタタル・バンキール共和国支持の知らせを受け、バンキール共和国は終りだと表明したこと、シャミグロフはバンキール共和国の中心には「ショービニスト」がいると表明し、政治部からカザン県へ代表を送り、バンキール共和国へ「献对的態度」を示したことが罪状とされていた。Там же, № 266.
- (5) Там же, № 280, с. 448-9.
- (6) Там же, № 322.
- (7) 1月16日事件と前後して「バンキールの間では、中央ソヴェト権力とその代表者があたかもバンキール共和国の自治を根絶しようとし、到る所にロシア人と他民族出身のロミッサールを据えつけようと望んでいるとの噂さが強力に広まっていた」のである。Там же, № 283, с. 463.
- (8) Там же, прим. 190, с. 899.
- (9) Там же, № 279.
- (10) 党州委員会書記 Я. Ярославровは、一月事件の処理のために州党委員会がとった措置を党中央委員会へ報告している。そのなかで、バンキール共和国の権威と機構が反ソヴェト行動に利用されうることに對して、「バンキール革命委員会は十分な配分で共産党が代表されるように再組織される」こと、「国家的(全ロシア的で特殊バンキールのでない)意義をもつ問題」はバンキール革命委員会の全露中央執行委員会代表により是認されること、バンキーリヤの軍とチェ・カ機関は直接全ロシア的機関の統制・従属下に入ること、などが決定されたと報告している。Ф. Самойлов, *Малая*

Башкирия, «П.Р.» 1926, № 11, с. 222. 一月事件の処理にあたり、党州委員会はバシキール革命委員会の人的構成と権限に強い政治的統制を実現する措置をとったのである。

- (11) «ОБАССР», № 280, с. 448.
- (12) Там же, № 280, с. 450, 453, 455, 456-7.
- (13) 政策批判は次の諸点にあった。バシキール革命委員会の下にある各カントンの革命委員会とその行政機関のバシキール僻村への設置、共和国の境界閉鎖と物資の搬入・搬出の防止、木材と樺樹皮の供給停止、食糧調達機関の排除、土地問題でのロシア人移民への圧迫、ソホーズ経営の略奪。См., Там же, с. 452-4.
- (14) Там же, № 280, с. 450-451.
- (15) Там же, с. 458-460.
- (16) この電文は全露チェ・カー議長 Ф. Э. Желжинскийへ宛てたものである。Там же, № 284, с. 465.
- (17) Шамигрофはタタル・バシキール・セクツィアの解散を問ひ質されたのに対し、サイド・ガリエフにそれはタタル・バシキールの党組織の「麻痺」の結果であり、「我々の戦術は貴下らに周知のことである、即ち、我々はブハーリン的方向をとっている」と突っ撥ねたのである。Там же, № 323.
- (18) Там же, № 277; В. И. Ленин, ПСС, 5-е изд., Т. 54, М., 1975, с. 711.
- (19) Там же, с. 423-4. この電文は党中央委員会書記 Н. Н. Крестинскийが書いた原文に、レーニンが「党中央委員会政治ビュローの委任を受けて」と書き添え、自署したもので、1959年に初めて公表された。Там же, с. 424. 当時、バシキール革命委員会の活動家は、自分達と見解を異にし、民族自治に懐疑的で否定的に対応する共産主義者を「ブハーリン主義者 бухаринцы」と呼んでいた。Ф. Самойлов, *Малая Башкирия*, М., 1933, с. 81. また、アルチョームやサモーイロフというウクライナで活動した共産主義者を「ウクライナ活動家」と呼び批判していたが、それは、アルチョームのウクライナでの活動に典型的に示されるように、彼らがウクライナの民族的自立を警戒し、中央部ロシアとの結合、即ちロシアへの併合に革命の大義を見出していたためである。V. Kubijovyč, ed., *Ukraine. A Concise Encyclopedia*, vol. I, University of Toronto Press, 1963, pp. 796-7.
- (20) J. M. Meijer, ed., *The Trotsky Papers*, Т. II, The Hauge Press, 1971, № 488, pp. 84-7.
- (21) *Ibid.*, p. 86, note 2.
- (22) *Ibid.*, pp. 92-5.
- (23) «ОБАССР», прим. 201, № 285.
- (24) Ф. Самойлов, *Малая Башкирия*, «П.Р.», 1926, № 12, с. 190; III. Типеев, указ. соч., с. 68.
- (25) «ОБАССР», № 285.

(26) В. П. Иванков, от. ред., Очерки по истории Башкирской АССР, Т. II, Уфа, 1966, с. 162.

IV 六月事件

一月事件によって露わとなったバシキーリヤの政治的対立がウファ会議によって調停に至る過程と並行して、3. ヴァリードフを中心にバシキール革命委員会も再編成された。ヴァリードフは、20年2月24日に K. カスプランスキー、И. ラフマトゥーリンを伴いモスクワからステルリタマクへ戻り、翌日の党州委員会幹部会でユマグロフ支持の発言をし⁽¹⁾、3月1日には次のような回状指令を発した。

「ソヴェト行政業務への共産党細胞の直接介入は許されないという州〔党〕委員会の明確な説明にも拘らず、未だなお、共産党細胞によるカントン革命委員会の個々のメンバーの逮捕にまで至る介入事件がみられる。

共産党細胞の側からのかような現象と介入は不法かつ許されるものではなく、〔バシキール共和国〕内務人民委員部は全てのカントン革命委員会へ次のように通知することを提議する。

- (1) 党は自らの党員にのみ指令権をもち、革命委員会と執行委員会の職務に就く者には決して指令権をもたない。
- (2) もし、カントン革命委員会が共産党細胞細員の行動を不正であると認めれば、このことを〔党〕フラクシオンへ通知するが、彼を勝手に捕えてはならない。
- (3) 共産党細胞とのあらゆる意見の相違、軋轢はロシア共産党州党委員会と〔バシキール共和国〕内務人民委員部へ通知せねばならない。
- (4) 革命委員会と行政者による共産主義者のあらゆる恣意的逮捕は厳しく追求される、しかし、共産党細胞による何人のあらゆる勝手な逮捕もそれに劣らず、断固追求される。

内務人民委員部事務取扱 ヴァリードフ
.....」⁽²⁾

この回状指令は、バシキール共和国でのソヴェト行政への地方の共産党組織、党細胞の介入に対して、カントン革命委員会を擁護し、両者の関係を調整・規制しつつ、自治バシキーリヤにおける最高行政権者としてのバシキール革命委員会とその下にあるカントン革命委員会の立場を通知したものである。

さらに、ヴァリドフらは第二回バシキーリヤ州共産党協議会の召集に反対し、3月1日付の党中央委員会宛書簡で「1) 党協議会の延期、2) バシキール共和国においてロシア人諸党をバシキール州委員会 Башобком に従属させ、バシキール・プロレタリアートの独裁^{ディクトاتور}を承認すること」を求めている⁽³⁾。しかし、第二回州党協議会は3月7—9日にステルリタマクで開かれ⁽⁴⁾、激しい対立の場となった。協議会では、共産党組織に対抗して、ソヴェト行政の自立性を維持し、早期のソヴェト大会召集により政治的ヘゲモニーを確保しようとしたヴァリドフ派に対し、ソヴェト大会の召集を延期し、ソヴェト権力と共産党の課題について全てのバシキール住民が「全く明確な判断」をもつよう「共産主義的煽動」を行うとの決議が採択され⁽⁵⁾、ヴァリドフ派は政治方針において敗れたが、協議会選出の党州委員会には、彼らから、Ф. トッフバトゥーリン、И. ラフマトゥーリン、К. カスプランスキーが入り、カスプランスキーは党州委員会書記の要職に就いた⁽⁶⁾。協議会の興奮醒めやらぬ3月12日、バシキール革命委員会は党中央委員会と全露中央執行委員会へ宛て声明書を提出した。そこで、近隣諸県と全露中央執行委員会全権代表からバシキール共和国へ敵対行動がなされていると訴え、州党委員会が専らバシキールとタタールから成り、バシキール革命委員会に好しくない共産主義者を共和国から追放することを求め、要求が満たされないときは、「直ちにバシキーリヤにおけるバシキールのソヴェト権力をロシアの権力 *русская власть* にかえ、更に必要ならば、バシキーリヤへ分離された領域を旧来の諸県へ合併する」と伝えた⁽⁷⁾。バシキール革命委員会は自らの共和国の解消を賭して、自らの政治主体の確立を強く求めたのである。

ヴァリドフらは一月事件後の政治的対立と混乱のなかから、ユマグロフにかわって新たな政治指導体制を築いた。バシキーリヤの共産党組織の中枢指導部を成す党州委員会の政治書記には、彼らのカスプランスキーが就き、第二回州党協議会に前後して改組されたバシキール革命委員会幹部会から、Ф. サモイロフがバシキール語を知らず事務が遅滞するとの理由で平成員に降格された⁽⁸⁾。中央から派遣され地方の共産党組織を指導したアルチョームは三月末から始る第九回党大会へ出席のためバシキーリヤを離れ、そのま

ま戻らなかった⁽⁹⁾。さらに、3月14日のウファ会議は全体としてバシキール革命委員会を擁護するものとなったが、その議定書の第三項は、バシキール革命委員会へのラフマトゥーリンとカスプランスキーの補充を規定していた⁽¹⁰⁾。このようにして、20年春に、ヴァリードフの指導の下でバシキール革命委員会が改組・強化され、党州委員会書記にカスプランスキーが就き、新たな政治指導体制、ヴァリードフ＝カスプランスキー体制が形成された。

バシキール共和国におけるヴァリードフ＝カスプランスキー体制は、バシキール革命委員会と地方の共産党組織という二つの対抗する組織を、前者の主導の下で、両組織の指導的人物の政治的配置により上から、再編・調整しようとする指導体制であった。サモイロフは、「政治書記」カスプランスキーの活動により、共産党州委員会は「演壇」と化し、バシキール革命委員会の「通報・教導部」に変わったと指摘し、党委員会にバシキールを「混入」することで共産党組織の「バシキール化」を行ったと厳しく批判・回想したのである⁽¹¹⁾。しかし、この政治指導体制の孕む矛盾は解消されず内攻し⁽¹²⁾、下方で、とりわけカントン・レヴェルの共産党組織とバシキール革命委員会の間で醸成された。ウセルガンスク事件はそれを鋭く示すものであった。バシキールリヤ南東部に位置するウセルガンスク・カントンでは、3月半ばに共和国内務人民委員部の禁止通知を無視して、党カントン委員会によってソヴェト大会が召集された。大会代議員の半数はバシキールであったが、アルチョームが大会の方向を定め、大会は貧農委員会の組織化と、土地問題に関する決定を行った。さらに大会では、10人のロシア人と10人のバシキールから成るソヴェト執行委員会が選出され、カントンのソヴェト権力の担い手が形成された。これに対して、バシキール革命委員会は党カントン委員会を解散し、党員の再登録を行い、不適当な人物を党から排除したのである⁽¹³⁾。

ウセルガンスク事件には、いくつかの問題＝事情が絡み合っていた。この事件の基調には春の農作業を前にしたバシキールリヤの土地改革の二つの方針の対抗が存在した。ロシア人入植農主導の勤労・均等土地用益の実現と貧農委員会設置によるロシア中央部型の土地改革と、入植者からのバシキール原住民の土地回復を主眼とする辺境植民地型の土地改革の対抗であったが、3

月1日の党カントン協議会は、バシキール共和国農業人民委員部の辺境植民地型の改革方針を否定し、カントン・ソヴェト大会でロシア中央部型の改革方針を決議・呈示したのである⁽¹⁴⁾。この事件は土地改革をめぐる対抗と同時に、地方の共産党組織の主導によるカントン・ソヴェト権力の形成と政策提示に、最高行政権者としてのバシキール革命委員会が対抗措置をとったという側面をもち、これは、バシキールの統治主体の組織的未形成の状態で共産党組織が事実上の統治主体となる一党政治システムが導入されることへのバシキール革命委員会の抵抗であった。最後に、ウセルガンスク事件はウファ会議後、立場を固め活動を積極化したバシキール革命委員会が、タミヤン・カタイ、ユルマトウイン、アルガヤシュ、トク・チュラン、ブルジャン・タンガウロフの一連のカントンで行った、共産党組織の解散や個々の党員の追放、さらに、ロシア人とタタールに対するバシキールの土地権益の擁護という全般的政治動向を最も鋭く反映する事件であった⁽¹⁵⁾。共産党州委員会はウセルガンスク事件について中央へ訴え、党中央委員会はΦ.サモイロフと3.ヴァリードフのモスクワへの召還とバシキール問題の報告を求めた。彼らは4月30日にモスクワへ向けて発った⁽¹⁶⁾。

自治バシキールヤでは、ヴァリードフ＝カスプランスキー体制の下で、政治的矛盾が内攻していたが、中央では20年春にバシキール問題委員会が設置され、バシキール共和国の国制に関する規定の準備・作成作業が行われていた⁽¹⁷⁾。モスクワへ召還されたヴァリードフを通じてバシキール革命委員会はその規定草案の情報を得、5月15日にはヴァリードフへ規草定案への不同意を打電した⁽¹⁸⁾。5月16日の党州委員会総会では、ヴァリードフ派はモスクワはバシキール問題への態度を変更したと判断し、総会を放棄した。このため総会はカスプランスキーを党州委員会の政治書記から解任し、ウセルガンスク・カントンの党組織の行動を承認し、その組織的再建を決定し、共和国内務人民委員Φ.トゥフパトゥーリンにはソヴェト大会召集のため「無党派ペテン師」を派遣しないように義務づけた⁽¹⁹⁾。この総会では地方の共産党組織の方針が確認され、ヴァリードフ＝カスプランスキー体制は大きな政治的打撃を受けたのである。

四月末のヴァリドフの召還、5月16日の党州委員会総会の決定、さらに続いて5月19日の全露中央執行委員会とロシア共和国人民委員会議の「自治ソヴェト・バシキール共和国の国制に関する決定」は、自治バシキールヤにおけるヴァリドフ＝カスプランスキー体制の崩壊と新たな政治危機をもたらし、六月事件の序曲となった。

5月19日バシキール共和国の国制に関する決定は、19年3月20日協定を受け継ぎ、一月事件を経るなかで「自治」へ国制的位置づけを行ったものであり、五項目から成っていた。この決定では、自治共和国の外務と対外貿易はロシア共和国中央機関の管轄であり、軍を監督するバシキールヤ軍事委員部はザヴォルガ軍管区委員部の指揮下に、反革命との闘争機関は全露チェーカーの系統下に入った(第二項)。さらに「ロシア共和国の財政と経済政策の統一」を保持するため、バシキール共和国の食糧、財務、国民経済会議、労農監察の各人民委員部と内務人民委員部の郵便・電信行政は「該当するロシア共和国人民委員部の直属下におかれる」こととされた(第三項)。結局、「自らの行動において自治的であり、バシキール中央執行委員会に直接責任を負う」のは、郵便・電信業務を除く内務、法務、教育、保健、社会保障、農業の各人民委員部となった(第四項)。さらにバシキール共和国は独自の財政源をもたず、ロシア共和国から必要な財政資金の配供を受けねばならなかった(第五項)⁽²⁰⁾。この5月19日決定を党州委員会幹部会は「ロシア共産党の戦術にも、地方の諸条件に適うという合目的性の必要にも絶対的に合致して」と歓迎したが、バシキール共産主義者はこの決定に大きな不満をもち、民族自治への脅威を覚えた。K.カスプランスキーは6月初めに、バシキール革命委員会の7人の黨員名で、党州委員会へ声明書を提出し、5月19日決定と原則的立場は異なるが、それでも共産党に留まりうるかを質した⁽²¹⁾。党州委員会は6月7日に「説明書簡」を作成し、この声明書に答えた⁽²²⁾。

「説明書簡」はバシキール共産主義者に対する地方の党指導者の基本的見解を示して、興味深い。「説明書簡」では、まず共産主義者は「地方的利害の視点」からではなく、「全体としての党、革命の利害」から出発すべきであり、「経済政策」は「階級政策、革命の強力な梃子」であり、「ソヴェト連邦の全

領域において単一であらねばならない」と党州委員会の基本的立場が述べられた。この単一＝全体性と経済＝階級のモメントが強調される論理においては、それと対比して「同志バンキール共産主義者」の見解は、個別＝特殊性と民族のモメントの主張と映った。「説明書簡」では、彼らの見解は「バンキーリヤには自らの特殊性が存在する、バンキール民衆は単一であり、……階級分化は生じなかった、経済的不平等の基本的形態は民族的諸矛盾の線にそっている、かくして、ソヴェト建設は……バンキールによってのみ、ロシアと異なる特別な形態で行われねばならない」と把握された。党州委員会はこのように見解の相異を対比しつつ、党組織の当面の全任務は、バンキール人民の階級分化を促進し、民族構成によらず、バンキーリヤの貧農とプロレタリアートに依拠するソヴェト建設を行うことであるとし、「共産主義者の責務は自治の必要性が消滅し、自治の必要性を条件つけた諸矛盾を深化させないように自らの活動を方向づけることである」と説明した。このように党州委員会は共産主義者としての基本見解を呈示し、「声明書」を提出した人々は「党イデオロギーが弱い」と判定しつつも、党に留りうると回答したのである⁽²³⁾。

モスクワにいたヴァリドフは、このような自治バンキーリヤにおけるヴァリドフ＝カスプランスキー体制の崩壊のなかに民族自治実現への脅威をみ、ステルリタマクのバンキール革命委員会メンバーへ、いくつかの書簡を送り、政治情勢を分析し、具体的行動方針を指示している。その書簡の一つで、彼は「中央 центр はバンキールスタンの全ての経済的富を奪いとり、同様に彼らの政治諸機関を自らに従属させ、我々には文化的民族自治に類いするものを残している。従って、自らの手にバンキールスタンの富を掴み取る努力が必要である」と情勢判断し、ロシア共産党から分離し、自主的に行動し、「東方共産主義者 коммунисты Востока」に合同し、「東方の貧しい全ての諸民族の解放」をスローガンとする「アジア東方共産党 Восточная Коммунистическая Партия Азии」の創設を訴えた。具体的にはバンキール活動家に、ムスリムの多住する「東方 восток」へ退去し、そこで精力的に行動することを指示していた⁽²⁴⁾。

ヴァリードフの指令をうけ、6月16日までにバシキール革命委員会は A.H. ヤガファノフ一人を残し、他の全ての成員がそれぞれ、「狩猟」「馬乳療養」「祭日」と理由をつけ、政務を放棄し退去した。カントンのレヴェルでも、政務の放棄と退去が行われ、「連邦中央権力に対して準備されている行動」について噂が飛び交った。チェマソヴォ村にはバシキール歩兵部隊と騎兵部隊が集結したが、赤軍に武装解除され、ノヴォ・ウスマノヴォ村で、6月17日にバシキール革命委員会メンバー30名が秘密会議を開いていた⁽²⁵⁾。6月20日のウスマノヴォ村での秘密会議で、彼らは次のような決議を採択し、山岳バシキーリヤ、キルギスタン（現カザフスタン）とトルケスタンのステップへ活路を求め分散・逃避していった。

「あらゆる方法で少数民族の発展を妨げているロシア人の覇権的諸傾向 великодержавные русские тенденции と、バシキール共産主義者への中央 центр の不信の故に、責任あるバシキール活動家はバシキーリヤを捨て、トルケスタンへ起つ。バシキール州委員会をその一部とする独自の東方共産党をそこに創設するためであり、その際、東方共産党はコミンテルンの一員とならねばならない。退去の目的は、ソヴェト権力に対し人民大衆を立ち上らせるためでは決してなく、ただ、役職の放棄によりロシアのショービニズムに抗議するためである。」⁽²⁶⁾。

このような事態に対して、6月21日に党州委員会は拡大会議を開き、無党派のヤガファノフはバシキール革命委員会メンバーとして出席し、バシキール革命委員会の立場を弁明した。彼は5月19日のバシキール共和国の国制に関する決定は「我々、責任ある活動家」に「致命的印象」を与えたとし、「我々は自治共和国を創設した、今や中央 центр はそれを与えない。我々は荒野で活動していることが明らかとなった」と、中央の支援によるバシキールの民族自治実現の可能性が空しく終わったことを述べ、苦渋に満ちた弁護を行った⁽²⁷⁾。結局、6月26日にヤガファノフから党州委員会によって新たに構成されたバシキール革命委員会へ全権力が移譲され⁽²⁸⁾、自治バシキーリヤにおける10日間の権力空白は党州委員会による新しい権力の形成をもって終わった。

註

(1) «ОБАССР», прим. 194, с. 899-900; Ш. Типеев, К истории..., с. 65.

- (2) «ОБАСССР», № 287. [] 内は訳者による補足挿入部分である。
- (3) Р. М. Раймов, Образование Башкирской..., с. 315. 党中央委員会書記クレンスチーンスキーは3月2日のトロツキー宛直電で「ヴァーリドフのステルリタマク到着は再び全てを錯綜させている。彼は最後通牒として3月6日予定の党協議会の中止を求めている」と伝えている。J. Meijer, *op. cit.* p. 84.
- (4) 当時の共産党の資料は3月9—14日に党協議会が開かれたとしている。「ОБАСССР», № 342, с. 588. すると3月12日の声明書は協議会開催の最中になされたことになる。最近の研究は開催の日付を3月7~9日としている。См., Р. М. Раймов, Образование Башкирского..., М., 1952, с. 315; «Резолюции областных конференций Башкирской партийной организации и пленумов обкома КПСС (1917—1940 гг)», Уфа, 1959, с. 112; В. П. Иванков, от. ред., Очерки по истории Башкирской АССР, Т. II, Уфа, 1966, с. 161—2.
- (5) «Резолюции областных конференций Башкирской партийной организации...», с. 112—5.
- (6) Ф. Самойлов, Малая Башкирия..., «П.Р.», 1926, № 12, с. 189; Ш. Типеев, К истории..., с. 67; Р. М. Раймов, Образование Башкирской..., с. 316.
- (7) «ОБАСССР», прим. 223, с. 904.
- (8) Ф. Самойлов, Малая Башкирия..., «П.Р.», 1926, № 12, с. 190; Ш. Типеев, К истории..., с. 67.
- (9) «ОБАСССР», № 242, с. 393; «Вопросы истории КПСС», 1963, № 3, с. 93.
- (10) Там же, № 285.
- (11) Ф. Самойлов, Малая Башкирия..., М., 1933, с. 83.
- (12) トルケスタン戦線軍事革命評議会の3月28日付指令第5号は、「最近、非常に好しくない現象がみられる」とし、「同志ロシア人共産主義者」と「バシキール人」が「屢々、取るに足りぬ動機と原因で自分達の間にも多くの口論と誤解」をつくり出していると警告している。「ОБАСССР», № 289, с. 473. 4月2日のオレンブルグ県第二回ソヴェト大会の決議でも、バシキールリヤではロシア人とタタールの権利が侵害され、民族主義的政策が行われていると、バシキール革命委員会への批判がなされていた。Там же, № 290.
- (13) Р. М. Раймов, Образование..., с. 317—320. このカントン・ソヴェト大会では、党活動家と代議員が一月事件や統治政策全般にわたりバシキール革命委員会を罵り、カントンの革命委員会をはじめ他の諸機関の改選が行われた。Ф. Самойлов, Малая Башкирия..., «П.Р.», 1926, № 12, с. 198—9.
- (14) ライームフはバシキール革命委員会の求める土地改革をブルジョワ民族主義的方針とし、このような二つの型の土地革命の対抗を指摘していないが、バシキール共和国農業人民委員部とウセルガンスク・カントンの共産党組織とソヴェト大会の土地改革の方向の対立は指摘している。Р. М. Раймов, Образование..., с. 317. ロシア帝国の辺境植民地の一つであるバシキールリヤにおける土地革命は1917~1923年に一応の完

- 了をみたが、そこでは明らかに二つの土地革命の型の対抗が存在した。土地をめぐるロシア人をはじめとする入植農民と原住バシキールの対抗が最も鋭く現れた地方の一つがウセルガンスタク・カントンでもあった。См. Р. М. Раймов, *Аграрная революция в Башкирии 1917-1923 гг.*, «Исторические записки», т. 32, 1950. с. 58-9.
- (15) Ф. Самойлов, *Малая Башкирия*..., М., 1933, с. 82-3.
- (16) Ф. Самойлов, *Малая Башкирия*..., «П.Р.», 1926, № 12, с. 200; Ш. Типеев, *К истории*..., с. 73.
- (17) Р. М. Раймов, *Образование*..., с. 430-431; Ш. Типеев, *К истории*..., с. 73.
- (18) «ОБАССР», прим. 223, с. 904. サモイロフはバシキール革命委員会の「地下秘密活動」は5月12日に始ったと指摘している。即ち、バシキール革命委員会は5月12日にヴァリドフから、直通電話で彼の「召還」について知らされ、翌13日のバシキール活動家の秘密会議では、ヴァリドフのバシキールリヤへの返戻とバシキール問題の再検討をモスクワへ求めた。翌14日には、より詳細な覚え書き電文をヴァリドフより受けとり、中央へ文書を送ったと指摘されている。Ф. Самойлов, *Малая Башкирия*..., с. 84-5; Ш. Типеев, *К истории*..., с. 75.
- (19) «ОБАССР», с. 47; Ш. Типеев, *К истории*..., с. 74; Ф. Самойлов, *Малая Башкирия*..., с. 84.
- (20) «ОБАССР», № 298. 5月19日のバシキール共和国の国制に関する決定と並行して、ヴォルガ＝ウラル地域のタタール、チュヴァーン、マリ、ヴォチャーキの各民族に自治共和国と自治州の創設と国制に関する規定が作成され、公布されていった。5月19日の決定は、この地域の諸民族を統合するものとして嘗て予定されていた「タタール・バシキール共和国」構想に最後の終止符をうつと同時に、内戦から解放された辺境民族地域に続々と誕生する「自治共和国」の基本的国制を示す文書となった。
- (21) «ОБАССР», № 300, с. 489-490; № 301; прим. 213, с. 903.
- (22) Там же, № 301, прим. 213, с. 903.
- (23) Там же, № 302.
- (24) Там же, № 303. ヴァリドフがバシキール革命委員会へ宛てた別のもう一つの書簡は、「現在、中央 центр は諸小民族 народности の自治に対する自らの政策を変更した。新たに改作された自治規定はニコライ二世とストルイビンの自治よりさへ悪い」と述べ、「モスクワではロシア人ショービニストが増大している」との判断を示し、ロシア人とタタールの共産主義者から分離し、別個の「アジア・バシキール共産党」あるいは「東方バシキール共産党」を組織し、「バシキールリヤの経済的富」の奪回が必要であると訴え、「東方の覚醒」に期待をかけた。Ф. Самойлов, *Малая Башкирия*..., «П.Р.» 1926, № 12, с. 205-7; его же, *Малая Башкирия*..., М., 1933, с. 89-91. ヴァリドフはモスクワからアストラハン県へ休暇に出、そこから、バクーの第一回東方諸民族代表者大会に出席し、バシキールリヤ、タタールスタン、キルギスタン、トルケスタンのロシア・ショービニズムに対抗する東方の共産主義運動の統一を志向していたと推定される。«ОБАССР», № 304, с. 496; № 313.

- (25) «ОБАССР», № 310, прим. 215. с. 903.
- (26) М. Л. Муртазин, Башкирия и башкирские войска в гражданскую войну, [Л.], 1927, с. 187.
- (27) «ОБАССР», № 304. 先のヴァリードフのバシキール革命委員会宛書簡では、ヤガファノフは連絡のため、退去せず留ることを指令されていた。См. Там же, № 303.
- (28) Там же, № 306, с. 500-501.

V 一党制政治システムの形成

バシキール共和国では、六月事件をはじめとする1920年夏から21年にかけての政治的激動を経て、一党制政治システムが形成された。この政治システムは共産党による、権力機関であるソヴェトへの「統制」と「監督」の政治体系であると同時に、民族自治を担い実現する政治体系としての機能も併せもつものとして成立した。

既に、ソヴェトに対する指導権をめぐり、バシキール革命委員会と党州委員会の激しいヘゲモニー争いが生じていたが⁽¹⁾、ヴァリードフ＝カスプランスキー体制の崩壊と六月事件という、共産党組織に有利な政治状況のなかで、ソヴェト大会の召集がなされていった。ヴァリードフ＝カスプランスキー体制の崩壊を意味した5月16日の党州委員会はバシキール革命委員会内務人民委員に、ソヴェト大会召集のため「無党派ペテン師」を派遣しないことを義務づけ、ソヴェト大会召集のイニシアチヴを掣肘し、5月27日の党州委員会のカントン党委員会宛回状書簡は、地方の党組織の先導でソヴェト大会を実施し、「有能な権威ある執行委員会」を自らのカントンの創設することを求めている⁽²⁾。

5月末から6月末にかけ、六月事件に前後する緊迫した政治状況の下で各カントンのソヴェト大会が開かれ、トク・チュランスク、アルガヤシュなどのカントンではバシキール革命委員会が支持されたが、他の多くのカントンでは、ソヴェト大会に対する共産党の先議が行れ、ソヴェトへの共産党の指導権が確定していった⁽³⁾。ブルジャン・タンガウロフ・カントンでも激しい政治闘争のなかで、バシキール革命委員会に対して共産党組織が勝利している。ここでは、カントン党協議会の先議を経て6月25日からチェミャソヴォ

村で第一回カントン・ソヴェト大会が始った。大会出席代議員は136名で、その党派構成は共産党員27名、無党派109名で、その民族構成はロシア人45名、バシキール84名、他民族7名であった。大会では共産党フラクションに対抗して、無党派フラクションが形成されたが、それは基本的にバシキールから成り、カントン革命委員会の成員が指導者達であった。他方、大会に出席した「無党派のロシア農民」は大部分が共産党フラクションを支持した。従って大会では、ロシア人入植農をも引きつけた共産党と、バシキール人を中心とする「かなり明瞭に民族主義的傾向を示した」無党派のフラクションが形成され対抗したのである。大会はその最中に六月事件の知らせを受け、興奮した状態になっている。バシキール代議員からは、共産党中央委員会は東方問題に於ける政策を変更した、モスクワ政府はバシキール人民を弄んでいる、チェミャソヴォ村にバシキール中央政府の声明を行う、との発言も出た。ロシア人工場集落プレオブラジェンスクからは60~70人の武装部隊が到着し、軍隊がバシキーリヤを包囲しており、自治は終わったとの噂も広まった。しかし、6月28日には六月事件の收拾が伝えられ、大会はバシキール革命委員会の逃亡を非難する決議を採択し、無党派代表はこれに抗議して退場した。大会は共産党フラクションから11名、無党派7名、民族別ではロシア人7名、バシキール11名から成るカントン・ソヴェト執行委員会を選出して閉会したのである⁽⁴⁾。

カントン・レベルでのソヴェト大会を終えて開かれた第三回バシキーリヤ州共産党協議会(7月19—22日)は、その決議で「旧バシキール革命委員会の逃亡後、自らにバシキーリヤのソヴェト建設の全責任を負い、新しい革命委員会を構成し、第一回全バシキーリヤ・ソヴェト大会の召集にむけて緊急措置をとりつつ、州委員会は形成された政治危機から全ソヴェト・バシキーリヤを救出した」と述べ、党州委員会による政治ヘゲモニーの掌握を誇示したのである⁽⁵⁾。党協議会はさらに、予定されている全バシキーリヤ・ソヴェト大会の重要問題を先議し、その決定はソヴェト大会出席の党員一代議員を拘束する指令となり⁽⁶⁾、協議会で選出された党州委員会は、ソヴェト大会で選出されるバシキーリヤ中央執行委員会の議長をはじめとする成員候補を

指名したのである⁽⁷⁾。

このように党州委員会によってソヴェト大会の召集と運営に対する政治的へゲモニーが確保されつつ、党協議会の先議を受けそれに直ぐ続いて、7月25—28日に第一回全バシキーリヤ・ソヴェト大会が開かれたのである。ソヴェト大会に出席した代議員103名の党派構成は共産党員94人、無党派9人と共産党員が圧倒的多数を成し、民族構成はロシア人43人、タタール22人に対し、バシキールは27人、他民族出身者11人と、原住バシキールの代表は少数に留った⁽⁸⁾。大会はバシキール民族主義者を排除し⁽⁹⁾、ロシア人共産主義者の主導の下に進行し、現情勢に関する決議で、「ただロシア共和国 РСФСР 政府との最新の同盟とロシア共産党の正しい指導の下でのみ、バシキール人民にとり栄えある幸福な生存に向け最も困難の少ない道が見出されるであろう」と述べ、ロシアとの「同盟」と共産党の「指導」を強調したのである⁽¹⁰⁾。大会はこのような政治的雰囲気を反映して、バシキールでありながら一貫して民族自治に否定的見解を持してきたГ.К. シャミグロフを、バシキール共和国のソヴェト中央執行委員会と人民委員会議の議長に選出したのである⁽¹¹⁾。

六月事件と並行して行われたカントン・ソヴェト大会、それに続く全バシキーリヤ・ソヴェト大会の召集と運営を通じて、地方の共産党組織によるソヴェトへの「統制」と「指導」の体系は成立に向ったが、同時に、シャミグロフを指導者とするこの政治体制の形成過程はバシキールの広範な匪賊活動 бандитизм を引き起こし、バシキール共和国は内乱状態に陥った。六月事件後、赤軍から脱走したバシキール部隊はウラルの山岳地帯へ集結し、ソヴェト権力への抵抗と攻撃に出たのである。バシキーリヤ南東部の山岳・森林地帯を中心に匪賊活動は夏から大きく展開し、11月には8つのカントンで衛戍令 осадное положение が布告されるに至った⁽¹²⁾。タミヤン・カタイ・カントンでは、バシキール匪賊が、輸送食糧貨物を略奪し、食糧集荷所を襲撃し、共産主義者とその協力者、ロシア住民に怨恨を伴う暴行を為し、ウラルの工業にも深刻な脅威を与えるに致っている。10月に党カントン委員会議長は党州委員会へ、バシキール匪賊の活動が、「食糧反革命」と「民族反革命」の性格を併せもち、「結局匪賊は自らの自然発生的広範さをもち、全てのソヴェト

建設を破壊しており、ソヴェト建設のあらゆる原則を無に帰している」と報告せざるを得なかった⁽¹³⁾。ブルヂャン・タンガウロフ・カントンでは「脱走兵の遊撃徒党」が増大し、8月1日から戒厳令 *военное положение* が布告され、匪賊活動との闘いが地方ソヴェト権力の第一の課題となった⁽¹⁴⁾。バシキール匪賊との闘争のため中央から派遣された B. ポレーノフとルヂェーンコは、共産党組織とソヴェト執行委員会を解散し、「狂ったポレーノフを頭とするロシア人ショービニスト」の「独裁」が行われた⁽¹⁵⁾。この「独裁」の拠点となったのは、3~4の鉱山と一つの工場があり、5~6千人の労働者を擁するバイマク地区であり、8月以降、ここでロシア人部隊が編成され、バシキール匪賊の鎮圧に向ったのである⁽¹⁶⁾。ここでは数百人のバシキール活動家が銃殺され、バシキールの遊牧生活を農耕へ定着させる行政措置と穀物割当徴発が行われ、「ソヴェト理念」の導入がはかられたが、バシキールは森と山岳地帯へ逃避し、匪賊となり抵抗したのである⁽¹⁷⁾。ウセルガンスク・カントンでは、この時期に勤労・均等基準による土地割替 *«уравниловка»* が行われ、ロシア人入植農民は遊牧バシキールの草地を「空地」とみなし、その占拠・分割を広範に行った。これもバシキールの匪賊活動を生む社会的土壌を成した⁽¹⁸⁾。

バシキールの匪賊活動は、六月事件でのバシキール部隊の赤軍からの脱走と集結、共産党のソヴェトへの「統制」と「指導」への反撥、ロシア中央部型の土地改革とバシキールの農業への定着強制、穀物割当徴発などの土地—経済政策への抵抗と、多様な要因を背景として生じたが、それは自治バシキールヤのシャミグロフを長とする政治指導部内の対立を強め、モストヴェーンコ派のシャミグロフ派に対する勝利となって帰結した。11月8日のバシキール共和国ソヴェト中央執行委員会と党州委員会の合同会議は、テーゼ「バシキールヤにおける民族問題と当面の諸課題」を採択し、シャミグロフの解任とバシキールヤからの追放、バシキール匪賊との和平交渉の方針を決定し、ポレーノフとルヂェーンコはバシキール弾圧の責任を問われ処罰された⁽¹⁹⁾。

11月8日のテーゼ「バシキールヤにおける民族問題と当面の諸課題」は、バシキール共和国における民族政策の基本方針の確定をもたらす文書となった。このテーゼは「いわゆる《民族主義》と自らの生活に対する民族主義的

見解は決して犯罪とみなされない」と述べ、民族自決権と民族主義を容認する基本的立場を表明した。その上で、バンキーリヤとロシア共和国の経済的「統一 единство」を確認し、ソヴェト権力機関へのバンキール大衆の引き入れ、無党派協議会の召集によりバンキール社会をソヴェト体制へ統合することをソヴェト建設の基本的課題と設定した。その際にテーゼは大衆の「民族的誤解」に忍耐強い啓蒙・宣伝活動で対応するのが唯一の正しい手段とし、「責任ある活動家の気象にみられるパルチザンシチナ «партизанщина»」に警告を發し、黨員とソヴェト活動家の越権と不当介入を批判し、ソヴェト合法性の遵守を求めたのである⁽²⁰⁾。

モストヴェーンコによって準備されたこの11・8テーゼへは、当時多くの黨員からバンキール民族主義者の危険を過少評価しているのではないかとの危惧がよせられた。とりわけ、シャミグロフ派はモストヴェーンコを「無能な政治指導者」として召還し、モスクワからシャミグロを帰還させることを求めた。彼らは11・8テーゼは民族主義者に統一の機会を与え、曖昧で矛盾する表現を含んでいると批判し、バンキール住民には「民族主義」は存在せず、存在するのは「経済的により強力なロシアの植民者への憎悪」であり、「民族主義」は非バンキール・インテリの外来のものであると断定し、テーゼは「民族主義への下手な賭」であると非難したのである。そして、テーゼの採択に際して、代表を送っていた九つのカントンの9人の代表中5人がテーゼに反対したことを指摘し、11月4日にモストヴェーンコによって召集された党州委員会総会以来、党州委員会には明確な政治方針が不在であると、党中央委員会へ訴えたのである⁽²¹⁾。中央から派遣されていたモストヴェーンコの自治バンキーリアにおける不安定な政治的立場を中央から支援したのは、党中央委員会総書記のH.H. クレスチーンスキーであった。中央はモストヴェーンコらの提案を受け入れ、シャミグロフらのバンキーリヤからの召還を決定したのである。モストヴェーンコ派はバンキール共産主義者と無党派のソヴェト体制への統合を志向し、バンキール匪賊の指導者C.Γ. ムルザブラトフとの交渉を積極的に進め、11月26日にはバンキール共和国中央執行委員会とバンキール匪賊との間での協定を成立させた⁽²²⁾。

バンキール共和国では、20年11月から翌21年2月にかけて、モストヴェー
ンコ派の主導により、ロシア共和国との「同盟」と党の「指導」という政
治的枠組をもつ一党制政治システムと、そこでの民族自治の基本方針が形成
された。この基本方針は、11・8テーゼに続いて出された21年2月8日の党
州委員会の党カントン委員会と党細胞へ宛てた書簡、2月20日の党州委員
会の「民族問題に関するテーゼ」などによって、その具体的な政治的内容が明
らかとなる。この基本方針は何よりもまず、バンキールの民族自治を容認す
ることを前提としていた。バンキール匪賊との協定を知らせた檄文「共和国
の全市民へ」で、バンキーリヤ・ソヴェト中央執行委員会と党州委員会は「ロ
シア民族の個々の代表と一連のグループが古い支配民族の慣習に従い、バン
キール共和国の自治と和解することを望まず……(中略)……ソヴェト的現実
の諸条件では全く許されないショービニズムの諸現象を発揮し続けている」
と厳しい自己批判をし⁽²³⁾、2・8書簡では、多くの党員がバンキールの自治に
「何か虚構」の如く対応し「一時的なもの」「必要悪」とみなす態度を批判し、
民族自治の容認を求めていたのである⁽²⁴⁾。そして、このような民族自治の容
認は、第一に「中樞＝辺境」論の枠組みのなかでとらえ直され位置づけられて
いた。2・8書簡は「ロシア中樞」は原・燃料、食糧のあらゆる資源に富む「辺
境 окраина」からの援助なしでは存続しえず、「ロシア辺境」は「より文化的
な中樞ロシアの政治的、軍事的、組織的援助」なしには破壊されると述べ、
中樞と辺境の経済プランの一致要求はバンキール民族の自決権とは矛盾しな
いと主張し⁽²⁵⁾、2月20日の党州委員会の民族問題テーゼは、さらに論理を進
め「辺境」のロシアからの分離は現在の国際的諸条件の下では「反革命的」
であると指摘するまでに至っていた⁽²⁶⁾。第二に、辺境の中樞との強い結びつ
きを強調するこのような「中樞＝辺境」論の枠組みのなかでは、辺境で実現
される「自治」は「地域自治 областная автономия」として構想された。2・8
書簡は、中樞と辺境の結びつきはバンキール民族の自決権とは矛盾しないと
述べたうえで、「中樞と辺境の間での唯一の合目的な連合 союз の形態は、
特別な生活慣習と民族構成で特徴づけられる辺境の地域自治である」と指摘
し⁽²⁷⁾、辺境での「地域自治」のなかにバンキールの民族自治の実現の場をみ

いただいたのである。従って、第三に、バシキールの民族自治は辺境の「地域自治」のなかで実現される民族政策として認識され、それはバシキールの母語を学校、裁判、行政に導入することであり、辺境の党とソヴェト機関を「可能な限り地方住民の生活、風俗、慣習、言語を知っている地方の人々」から構成することと具体化された⁽²⁸⁾。そして、このような政策の遂行にあたっては、辺境での「純粹共産主義」の導入が戒められ、抑圧民族のプロレタリアートの被抑圧民族勤労者に対する「慎重さ」が求められたのである⁽²⁹⁾。最後に、このように論理構成された辺境バシキールヤでの民族自治（辺境の地域自治における民族政策の体系）の実現主体は、2・8書簡では「東方における共産主義」と「民族主義」ではなく、民族同権とインターナショナリズムに立脚した「単一の分裂のない党 *единая целая партия*」に求められた⁽³⁰⁾。同時に、自治バシキールヤにおける民族自治の主体たるこのような共産党組織の中央に位置する党州委員会には「自治」ではなく、党中央委員会への「直属」が制度的に確定していくことになる⁽³¹⁾。

中央からの支援と影響を受けつつ⁽³²⁾、モストヴェーソコ派の主導の下でバシキールヤで成立した一党制政治システムと、そこでの民族自治の政治体系は、21年3月の第十回党大会の「民族問題に関する決議」によって確認され、1920年代を通じて維持される政治体系となった。第十回党大会の「民族問題に関する決議」は、大ロシア人共産主義者の「覇権主義 *великодержавность*」、植民主義 *колониаторство*」と原住民出身共産主義者の「ブルジョワ民主主義的民族主義」の二つの「偏向」を指摘し、前者の「特別の危険と害」を警告する枠組において⁽³³⁾、バシキールヤでの一党制政治システムとそこでの民族自治の政治体系に安定化をもたらしたのである。

註

- (1) 1920年4月9日にバシキール革命委員会はヴァリドフを長とするソヴェト大会召集委員会を設置し、ソヴェト大会は「厳しく民族別人口適正区分の原則 *принцип этнической пропорциональности*」に基づき、選挙・召集され、「被抑圧諸民族と被抑圧階級が大会に完全に代表されるよう」諸措置をとることが確認された。《ОБАССР》，№ 291。しかし、5月16日の党州委員会の直後に、党州委員会は党協議会をソヴェト

大会に先行させ、ソヴェト大会召集の準備を党組織の裁可の下に行う方針を出した。Там же, № 292. これに対して、バシキール革命委員会はカスプランスキーを長とするカントン・ソヴェト大会召集委員会を設置し対抗した。Там же, прим. 209, с. 901-2.

- (2) Там же, с. 47; № 293.
- (3) Там же, прим. 209, с. 902.
- (4) Там же, № 312.
- (5) Там же, № 329.
- (6) Р. М. Раимов, Образование Башкирской..., М., 1952, с. 234.
- (7) «ОБАССР», прим. 232, с. 907. 協議会で選出された党州委員会の幹部会は, Г. Шамигулов, Ф. Манрсыев (新バシキール革命委員長), П. Н. Моственко (党中央委員会と全露中央執行委員会代表) П. Н. Викман で構成され, ヴィクマンが政治書記 поолитсекретарь となった。Там же, с. 49.
- (8) «Съезд Советов РСФСР и Автономных республик РСФСР», сборник документов, 1917-1922 гг., Т. I, М., 1959, с. 528-9. 大会代議員の民族構成はバシキール, 27名 (26.2%), タタール 22名 (21.3%), ロシア人 43名 (41.7%) であり, 1920年のブルジャン・タンガウロフ, タミヤン・カタイ両カントンを除くバシキール共和国の民族別人口構成は, バシキール (チェプチャーリを含む) 38, 6%, タタール 18, 5%, ロシア人 33, 8% であった。Труды ЦСУ. Т. XVIII, М., 1924, с. 30. バシキールの多住し, 匪賊活動の中心となった南東部のブルジャン・タンガウロフ, タミヤン・カタイの両カントンの人口を加えると共和国のバシキール人口比率はさらに増大すると考えられる。1917年の農業調査によるとタミヤン・カタイ・カントンを成す地域の人口 153,951人中, バシキールは 41.52%, タタール 15.81%, 他民族 42.64% であったからである。С. Атнагулов, Башкирия..., с. 84. 以上の数字からロシア人とタタールが人口比率より高く大会へ代表され, バシキールに関しては逆である。従って, ほぼ民族別人口に比例して, 代議員が選出されたというライーモフの指摘は正しくなく Р. М. Раимов, Образование Башкирской..., с. 337., Pipesの「この大会は立憲議會の諸機能を果すものであったが, やはりどのようなバシキールも含んでいなかった」という断定も正しくない。R. Pipes, The First Experiment..., p. 318.
- (9) 大会でモストヴェーノコはバシキール代表の少ないのに驚き, シャミグロフに疑念を呈したが, シャミグロフは「選出されたある者は我々が民族主義者として逮捕した。残りは, この後, パニックに陥り各方面へそれぞれ逃亡した。そして, 彼らの地位を殆んどロシア人とタタールが占めた」と答えていた。П. Моственко, О больших..., с. 104. また, 大会召集特別委員会の報告をうけ採択された決議は, 「選挙結果に満足できず自らのポストから逃亡した反人民的な旧バシキール革命委員会の代表」を排除し, 「責任ある活動家」に取り替えたと確認している。「Съезд Советов РСФСР...», с. 531; «ОБАССР», № 328, с. 541. ライーモフは大会代議員は 127名で, その内 103名が出席し, 20名以上が「ヴァリードフと共に逃亡した」と説明している。Р. М.

- Раимов, Образование Башкирской…, с. 335.
- (10) «ОБАССР», № 328, с. 543.
- (11) Гражданская война и военная интервенция в СССР. Энциклопедия, М., 1983, с. 58. Шамигулов (Г. К. Шамигулов, 1890–1959) はバシキールで、1910年以來社会民主党的の活動に加わり、革命と内戦期には民族エヒリズムの強い傾向を示した。1920年7月以降、党州委員会幹部会メンバーで兼、バシキール共和国ソヴェト中央執行委員会議長、同人民委員会議長として、バシキールリヤの党とソヴェトを指導したが、モストヴェーンコらによって政治指導から排除されることになる。J. M. Meijer, ed., *The Trotsky Papers*, T. II, pp. 87–8.
- (12) 当時バシキール共和国に存在した11のカントンのうち、ブルジャン・タンガウロフ、タミヤン・カタイ、ウセルガンスク、キプチャクなどの山岳・森林バシキールリヤのカントンが匪賊活動の中心となった。P. M. Раимов, *Образование Башкирской…*, М., 1952, с. 364.
- (13) «ОБАССР», № 333, с. 557–8.
- (14) Там же, № 331, с. 554.
- (15) Там же, № 359, с. 571–2.
- (16) С. Атнагулов, Башкирия, М., 1925, с. 33, 73–4. 1918年春にも、ロシア人を中心とするバイマク市労働者ソヴェトと近隣のバシキール集落の対立は、「バイマクの悲劇」を生んでいた。Там же, с. 58–9.
- (17) P. M. Раимов, *Образование Башкирской…*, с. 364; Ш. Типеев, *К истории…*, с. 149.
- (18) Там же, с. 363–4.
- (19) М. Л. Мургазин, Башкирия и башкирские войска…, с. 189, 194; П. Моственко, *О больших…*, с. 128; P. M. Раимов, *Образование Башкирской…*, с. 365; «ОБАССР» прим., 233, с. 907. Моcтвeнко (П. Н. Моственко 1881–1939) は1901年以來の黨員で古参ボリシエヴィキーであり、1920年4月末にヴァリドフとサモイロフがモスクワへ召還された後、エジニ・ノヴゴロドから経験ある党活動家として、バシキールリヤへ派遣されていた。Советская историческая энциклопедия, Т. 9, М., 1966, с. 750.
- (20) «ОБАССР», № 334, с. 559–62. 「バルチザンシチナ」という用語は機会的な、計画と体系性を欠いた党の直接的統治活動の意味で否定的に用いられ、内戦期のウクライナで既に問題となっていた。B. M. Волин и Д. Н. Ушаков, глав. ред., *Толковый словарь русского языка*, Т. III, М., 1939, стб. 53; «КПСС в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК», Т. II, М., 1970, с. 124.
- (21) Там же, № 335. これは地方の党活動家が11月18日付で党中央委員会へ宛てた書簡である。

- (22) П. Моственко, О больших ошибках..., с. 125-8; М. Л. Муртазин, Башкирия и башкирские войска..., с. 189, с. 194; «ОБАССР», № 336. Мулзабратов С. Г. Мурзабулатов はバンキール革命委員会成員であったが、六月事件後、ブルジャン・タンガウロフ・カントンでバンキール匪賊を指導した。ソヴェト権力との協定後、21~22年にバンキール共和国農業人民委員を務め、辺境・植民地型の土地革命の実現を志向したが、バンキールリヤでの23年5~6月のスルタン・ガリエフ事件に連座して、「熱烈かつ有害な民族主義者」として、全ての責任あるポストから解任され、共和国から追放の決定を下された。Там же, № 362, с. 645; № 386, с. 684; с. 929.
- (23) «ОБАССР», № 336, с. 564.
- (24) 2. 8書簡は11. 8テーゼと11月26日のバンキール匪賊叛徒との協定により、党活動家に「若干の不满」が生じているのを考慮して、党州委員会書記局によって出されたものである。Там же, № 340, с. 575-6.
- (25) Там же, № 340, с. 577.
- (26) Там же, № 341, с. 584-5. この2. 20テーゼは М.Д. ハーリコフによって作成され、党州委員会幹部会で承認され、第四回州党協議会(2月21~25日)に提出され、採択された。Там же, № 344, с. 591; «Резолюции областных конференций Башкирской партийной организации и пленумов обкома КПСС (1917-1940 гг.)», Уфа, 1959, с. 134-7.
- (27) «ОБАССР», № 340, с. 577.
- (28) Там же, № 340, с. 578.
- (29) Там же, № 341, с. 585-6.
- (30) Там же, № 340, с. 578-583.
- (31) 19年11月の第一回州党協議会で既に、バンキールリヤの党組織の中央は州委員会として党組織のなかに位置づけられることが認識されていた。Там же, № 253. 2. 8書簡は「単一の分裂のない党」の建設に於ては、「諸地方 области の広範な自治を排除するものではなく、前提することは自明である」と結び Там же, № 340. с. 583. 党州委員会の広範な自治を示唆するものであった。しかし、21年2月下旬の第四回州党協議会は党組織にも「自治」を拡大しようとする「民族主義分子」の企図に対して、バンキールリヤの党組織は州組織として党中央委員会へ直属することを再確認したのである。Там же, № 343, с. 590, прим. 239.
- (32) バンキールリヤでの民族自治の理論的枠組の設定に民族人民委員スターリンの影響が強く現れている。とりわけ2. 8書簡と2. 20テーゼにみられる、中央と辺境の強い結合を求める「中樞=辺境」論や民族自治の実現を「地方自治」の民族政策に求める見解は、スターリンの20年10月の論文「ロシアの民族問題に関するソヴェト権力の政策」に強い影響を受けていた。2. 20テーゼを作成した М.Д. ハーリコフは、第四回州党協議会の開催前に、スターリン提案で党中央委員会の承認をえた民族問題資料を受けとり、自らのテーゼとスターリンの立場が一致していることを確認している。

《ОБАССР》, № 344, с. 591-2. ハーリコフは、又、3月の第10回党大会で民族問題委員会のメンバーを務め、大会の民族問題に関する決議の作成にも関与することになる。Десятый съезд РКП(б). стенографический отчет. М., 1963, с. 765.
 (33) Там же, с. 606-7; 《ОБАССР》, № 345, с. 597.

結びにかえて

1919年3月にソヴェト権力との間で協定が成立し、バシキールの民族解放と自決を求める運動は、ロシア連邦共和国 РСФСР のなかで自治を実現していく運動となった。バシキール革命委員会は、一方では、ウラルのロシア人鉱山・工場労働者と入植農民を社会的基盤とし、それに依拠し民族ニヒリズムと大ロシア覇権主義の傾向を示す地方の共産党組織とソヴェトに⁽¹⁾、他方では、ヴォルガ＝ウラル地域にタタールの覇権の下にバシキールを同化しつつムスリムを統合し、「タタール・バシキール共和国」の創設を求めるタタール共産主義者とも対抗しつつ、バシキールの自立的な民族自治の実現を目指した。1920年の一月事件はバシキール革命委員会をめぐるこのような対抗関係のなかで、地方の共産党組織がバシキール革命委員会への政治的指導の実現を求めたことで、バシキール革命委員会の政治的主体性への脅威が一举に先鋭化したことを背景としており、六月事件は5月19日の「自治ソヴェト・バシキール共和国の国制に関する決定」が、バシキールの民族自治を国制において確定・制限し、「文化的民族自治に類するもの⁽²⁾」に帰したことへの、バシキール革命委員会の抗議的示威であった。六月事件後にバシキールの匪賊活動が展開するなかで、カントンでのソヴェト大会、第一回全バシキーリヤ・ソヴェト大会が開かれ、共産党のソヴェトに対する政治指導の実現が緒に就き、1921年春までに自治バシキーリヤに一党制政治システムが成立した。

一党制政治システムは、ロシア中央部では18年夏の危機を経て、革命諸党派の「共闘」が地方ソヴェトで崩壊するなかで、19年春までに形成されたが⁽³⁾、辺境バシキーリヤでは、他党派への不信と排除、何よりもバシキールの民族自治を担う政党としてのバシキール自らの主体形成を閉塞させることにより、20年末から21年初めにかけて、ソヴェトに対する共産党の「指導」

と「統制」の独占的政治体系として成立した。この政治体系はロシア中央部では、中農との同盟と無党派農民をはじめとする無党派協議会の召集による体制への社会的統合という新しい政策提示を伴うものであったとすれば⁽⁴⁾、自治バンキーリヤでは民族政策の基本方針の確定を内包するものであったのである。その民族政策の基本方針で確認された「自治」は中央部ロシアからの「分離」ではなく「結合」を強調するものであり、又、その「自治」は特殊な辺境地域の「地域自治」としてとらえられ、バンキールの民族自治は辺境バンキーリヤの「地域自治」のなかで個別具体的な民族政策を通じて実現されるものと理解された。そして、この「自治」の担い手は、バンキールの政治的主体形成を閉ざすことにより、民族的差別なく組織される「単一の分裂のない党」に委ねられ、その「党」は「大ロシア・ショービニズム」と「地方ブルジョワ民族主義」という二つの「偏向」を絶えず批判しつつ、党とソヴェト機構自体を「民族化＝バンキール化 национализация-башкиризация」し、バンキール社会に根をはる коренизация という重い課題を負うことになった。自治バンキーリヤで成立した一党制政治システムとその民族政策が、現実はこの重い課題を負いつつ孕む矛盾もまた由々しいものであった。この矛盾は1923年のバンキール共和国におけるスルタン・ガリエフ事件のなかで、その所在と様相を明瞭に示すことになるが⁽⁵⁾、ともあれ、辺境バンキーリヤに於ける一党制政治システムの形成は、この地域における革命と内戦から1920年代政治史への基本的な転換点を成すことになったのである。

註

- (1) S. A. Zenkovsky, *The Tataro-Bashkir Feud of 1917-20*, pp. 44, 48-9. バンキーリヤの共産党組織は圧倒的にウラルの鉱山・工場のロシア人労働者と入植ロシア人農民から成っていた。たえずそのバンキール化が求められたにも拘らず、バンキーリヤの共産党組織の民族別構成は1925年1月1日現在で、ロシア人60.3%、タタール19.9%、に対して、バンキールは13%であった。Ш. Типеев, *К истории...*, с. 89-91.
- (2) «ОБАССР», № 303, с. 494.
- (3) 拙稿「ロシア革命と地方ソヴェト権力——一党制政治システムの形成によせて」『スラヴ研究』32号, 1985, 171~181頁。
- (4) «Переписка секретариата ЦК РКП(б) с местными партийными органнз-

バンキール自治共和国の形成

ациями (апрель-май 1919 г.)), сб. документов, т. VII, М., 1972, с. XIX, № 547, с. 420-421.

- (5) 拙稿「バンキール自治共和国 (1921~23年) ——一党制政治システムの形成とその矛盾によせて——」『北大史学』第26号, 1986年8月。